

---

# ディア・マイ・フレンズ

水瀬 悠希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ディア・マイ・フレンズ

### 【Nコード】

N6945S

### 【作者名】

水瀬 悠希

### 【あらすじ】

世界の片隅で広げられる、ほんのささやかなドタバタ？ ストーリー。

——色々と適当にご都合主義です

## キャラクター設定（前書き）

読み返してみたら、キャラクターがいっぱい。  
人物設定をまとめてみました。

## キャラクター設定

### ◆主人公たち

天城 瑞希……あまぎ・みずき。

種族…人間（♂）

新王国暦1296年4月2日生まれ。

一見すると女の子に見えるが、本人は成長期が遅いせいだと信じている。

小さいころは、女の子と勘違いされる事が多かった事もあり、男  
子から告白されたり、  
悪戯されそうになった事もある。

赤来 佐奈……あかぎ・さな。

種族…人間（♀）

新王国暦1296年3月30日生まれ。知的クールビューティー  
な生徒会会長。

瑞希の幼馴染で瑞希至上主義。彼女に告白した男子は、全て断わ  
られている。

膨大な魔力を持ち、とそれを使いこなす才能がある。

### ◆瑞希の同級生たちとか

速水・大地……はやみ・だいち。

種族…人間（♂）

瑞希の幼馴染、親友。

瑞希同様、子供っぽいかわいらしい顔つきをしている。  
生まれつきの容姿は運命だと悟りきっている。

フェーリス・加藤……ふえーりす・かとう

種族…猫又。(♂)

この世界には猫又の他にも妖怪が出てきますが、おおむね人間に好意的。

先祖返りを起こしたせいか、家族の中では彼だけが長毛種。

石橋・ローリン……いしばし・ろーりん

種族…人間(♂)

生徒会副会長。通称(?)勘違い男。かなりのイケメンだけど、特定の彼女はいない。

愛川・文香……あいかわ・ふみか。

種族…人間(♀)

佐奈の同級生。

茶筒よりもスレンダーな体型という可哀想な人です。

#### ◆学校の先生

アンディ・堀井……あんでい・ほりい。

種族…ドワーフ(♂)

教科…体育

それなりに筋の通った指導をする脳筋野郎。手先を使う細かい仕事は苦手。

五月・マスイード……さつき・ますふいーど。

種族…ハーフエルフ(♂)

教科…歴史学

元傭兵で、いくつもの激戦地を渡り歩いたが、引退後に教師となった。

椎名・マルシア……しいな・まるしあ。

種族…人間（♀）

教科…ラジルポ語

ヤポネス系ラジルポ人2世。見た目は20台後半。召喚魔法が使える。

#### ◆その他

エスター・トレーセロ・デ・パープル・ハイウインド

種族…ハイエルフ。（♀）

国王より権力があると言われている美女。神代の時代から生きているらしい。

ハイエルフはエルフの中でも至高の存在とされている稀少種族。

アルマレーロ・ヴォウ・トウティア・オルス・ドゥーラ

種族…人間（♂）

ドゥーラ王国の国王陛下。通称は殿様。エスターはアルマと呼んでいる。

コペポータ・ピューレックス

種族…ハーフドワーフ（♂）

国教会の大司祭。

この国は多神教国家なので、全ての宗派の取りまとめ役みたいな事をしている。

天城 数馬……あまぎ・かずま。

種族…人間（♂）

瑞希の父。ドゥーラ王国騎士団団長

天城 希……あまぎ・のぞみ。

種族…人間（♀）

瑞希の母。ドゥーラ主席王宮魔導士

表面的には、おっとりした雰囲気をもっていますが、せっかちで気が短い。

結界魔法のスペシャリスト。

## キャラクター設定（後書き）

こうしてみると、それなりに人数がいたんですねえ（笑）  
これについては、随時更新をする予定です。



## プロローグ

とある日の深夜のこと。

住宅街にある変哲もない一軒の家でそれは起こった。

真夜中の部屋の中に、CDほどの大きさのリング状の光が現れた。月の光以外には光を発するものなど何もないはずなのに。

月の光すら切り裂く光の輪は、部屋の中にあるものを照らし出した。

光の当たっているところだけが切り取られたように、闇の中から浮かび上がる。

それは部屋の中で何かを探すかのように、音もなく鋭く動き始めた。

闇を切り裂くために、緑がかった黄色い光を放ちながら。

無造作に置かれたかばんを照らし、机の上を通り抜け、壁を這い

……

床の上を滑るように流れ、天井を走り抜けて。

ハンガーに吊るされた衣服を、本棚を照らし出す。

やがてそれはベッドの上で止まった。

そこで光を弱めると、光の輪は動きを止めた。

ベッドで寝ている者を慈しむように、眠りの邪魔をしないように。そして……

## プロローグ（後書き）

更新は不定期なるかも知れませんが、生暖かい目で見守っていただけると幸いです。

感想、ご意見お待ちしております。

## 第1話

昨夜は妙な夢を見たような……

とにかくよく眠れなかったのは確かです。

ふと布団を眺めると、自分が寝ていたすぐ隣の部分がこんもりと盛り上がっている。

そう、いつの間にか僕のベットに侵入して眠りこける女の子の存在も、いつもの通り。

彼女の家と隣同士というのは、王道的なお約束だと思う。それはいいんだけど……

「まったく、いつもいつも… どうやって入ってくるんだろう……」

部屋のドアや窓には鍵はかけてあるし、家の周りに展開している防御結界は、侵入者を無条件で近所の公園に転送するようになっている。

加えて言えば、この結界は母さんの趣味でマニアックに改造された特別製で、その完成度は王国騎士団の特殊部隊のお墨付きだ。

母さんから、寝る前になって部屋の中にも展開すると言われたのには驚いたけど。

一番の欠点は、結界を解除しない限り、外には出られないという事かな。

でも、昨日って、何かあったかなあ……

昨日の午後あたりからの記憶がごっそりと抜け落ちてる。

昨日は、きのうは… キノウは… キノウはナニガアッタ!? 胃の上のあたりに、冷たい何かがあるような嫌な気分… それよりも思い出そうとすると頭がきりきりする。

「とりあえず起きるか」

枕元の目覚まし時計のスイッチを切ると、机の上に置いたる魔方陣に目を向けた。

上に置いてある魔晶石には異常はないようだ。

「ふう……」

上半身だけ起こした状態の僕の腰に、両腕でしがみついたような恰好で、彼女はすやすやと眠っている。

そっと布団をかけなおすと、じくつと寝顔を眺めてみる。  
よしっ！ 起きる気配はないな。

「んんっ……」

甘い声と共に、腰に回った手に力が入った。

や、やばいぞっ！

無意識のうちに、右手は枕を探して……よし、あった。

「お……おはよう」

「ふぁ……ん……う……」

くしくしと眼を擦って挨拶を返す。まだ寝惚けてる。よし、今のうちに脱しゅ……

「おはよう……みんなきい」

鈴を転がすような声が聞こえ、鼻先と鼻先が触れ合う距離まで迫った顔。

くそっ、右手首を握られて僕は仰向けに押し倒されて。

——むちゅっ！——

「んんんっ」

覆い被さった佐奈は、枕を持った右手はおろか、身体をガツチリとホールドしていて動きが取れません。

体育の授業で、押さえ込みに対する返し技は習っているのですが

……

「えへへっ ご馳走様でした」

## 第2話

女の子から解放された僕はベッドから飛び出した。

「よく母さんの特製結界を抜けられたね？ 昨日の夕方改良したばかりだよ」

「お義母さまが私専用には、バックドアを作ってくれたに決まってるじゃない」

「母さんが？ ……余計なことを」

「仕事で帰れないから世話をしあけてね、って言われてるし」

忘れてた。

父さんも母さんも、昨日は王宮に泊まり込みだって、言ってる……いた？

そうだったかな。

……まあ、いいか。それよりも、問題はこの事実だ。

淡い桜色のパジャマをだらしなく着込んで、寝癖でばさばさ髪の毛の子だ。

「……だからって、コレはないでしょ？」

「いいじゃない、両方の親公認のお付き合いよっ」

こう言い切ったのは、赤来・佐奈……あかぎ・さな。

新王国暦1296年3月30日生まれ。

家が隣同士の幼馴染というやつで、お互いの両親が子供の頃からの大親友だという事もあるって、今でも家族ぐるみの付き合いが続いている。

佐奈は僕の通う中学校の2年生で、入学以来、主席をキープし続けているとか……

人となりを紹介するなら、性格は誰に対してもやさしいし、勉強もできる。

僕に言わせれば、猫をかぶっているというか、着ぐるみを着てるというか。

実際のところ、家族にも見せた事の無い本性というか、その中身は……

まあ、今朝のような事はよくある事です。

いつもは僕の方が早く目が覚めるので、どうにかなっていたけどね。

他にもまあ、色々あるけど……

かくいう僕は、天城・瑞希……あまぎ・みずき。

新王国暦1296年4月2日生まれ。

つまり、齢14にして中学1年生なだけど……

身長は140ちょいだし、昔から女の子みたいと言われ続けてきた。

着ている学生服も一番小さなサイズなのに、少し大きめだし、何よりも似合っているようには見えない。

でも、成長期が来るのが遅れているだけだから。

何とかなるといいな……

何とかなるさ。

……きつと。

きつと神様はいると思う……

「……瑞希ったら！　ぼくとしてないで、時計見て！」

「んんん？」

よかった、佐奈が元に戻ったようだ。

「なにボーっとしてるの!?! 時間ないわよっ」

「えええっ?」

時計を見ると、朝の7時… ひちじい!?!

「朝ごはんの準備しておくから早く着替えを済ませてねっ」

「いや、そんなに慌てなくても遅刻はしないから。それより佐奈は家に…」

「私はお義母さまの部屋で着替えてくるから。じゃっ、まったねえ」

いや、ここは家に帰る場面でしょ。



## 第2話（後書き）

ようやく主人公の名前が出てきました。

中学校に入学したばかり、なんですけど……

さあ、どういじりましょうか（笑）

### 第3話

家から学校までといっても、大した距離じゃない。

ゆっくり歩いても20分とかからないし、母さんの転移魔法なら：

げふんげふん、ごめんなさい、忘れてください。  
転移先の座標を『うっかり』間違えて、鍵の掛かった体育倉庫に転送されたのは先週の話です。

その日も今日と同じ金曜日だったこともあって、週明けに発見されるまで、倉庫に閉じ込められたままでした。食べ物と水だけは転送してくれたけど。

そういうわけで。

学校を囲んでいる城壁と呼んでも差し支えない壁を回り込んで、正門を抜けると広い校庭の先に校舎が見える。

正門のあたりには、小さいながらも本格的なアルビオン風の庭園があつて、そこを抜けると、運動場があるんだけど、そこがまた広いんだよね……

白亜の校舎という二つ名にふさわしい純白の校舎は、中央の時計塔を中心に、鳥が翼を広げるような配置になっている。

どれだけ広いかというと、普通に歩いても10分近くかかるんだよね……

庭園の中ほどで待ちかまえていたのは一人の男子生徒だった。

「天城さん…… オレと付き合ってください！」

「僕は男だけど」

「嘘だろう！ こんなに可愛いのに」

……なんかなあ、またなのか、って感じた。

男子が男子に告白って、何を考えてるんだろう。

「可愛いって言うな！」

「うむ、自分が美少女だという自覚が無いのか」

……人の話を聞いてくれ。

僕はがっくりと肩を落とすと、唸るように声をひねり出した。

「どうやったら学生服とセーラー服を見間違えることが出来るんだよ」

「校則には学生服かセーラー服着用としか規定はないからねえ。君が学生服を着ていても問題はないはずだ。君の場合はセーラー服の方が似合うような……」

告白してきた勘違い男は理解していないようだった。

「だから！ 僕は男だっ！」

「そう言ってるだけで、本当に女かも知れないだろうが……！！」

「しつこい男は嫌われるわよ、石橋？」

あ、そうだ、思い出した。

石橋・ローリンだ。生徒会副会長の……ってちょっと待って？

背後から聞こえる鈴を転がすような、そして、不機嫌そうな声。

それを聞いた僕は、全身が石化したかのように硬直する。

いや、コカトリスに睨まれても、これほどきれいに固まりはしないと思う。

背中に嫌な汗が流れてくる。

彼女がこんな口調で話すときは充分に危険なのだという事を、この勘違い男は、判らないんだろうか……

副会長なら佐奈とは生徒会でいつも一緒のはずでしょ？

### 第3話（後書き）

転移魔法も魔力の大量消費という意味ではすごいかも。  
でも、まあ、天城くんのお母様ですから…… オツケーという事で。  
そのうちにこの辺の設定を纏めてみるつもりです。

## 第4話

背景にゴージャスな花園を背負った勘違い男は、さらりと髪をかき上げながら言った。

しゃらくん、とか擬音が出てるよ、きつと。

「恋愛は自由だろ？　しかし知的クールビューティーな生徒会長の正体が百合だったとはびっくりだ。それでは告白してくる男子が全員フられるわけ……」

その言葉をさえぎるかのように絶対零度の声が響く。

「石橋？　私の視界から5秒以内に消えなさい。　…5」

「なんだって？」

「4、3…」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。一体キミは何をそんなに怒って…」

「2、1。　……短い付き合いだったわね」

佐奈が唱えてる呪文の内容は……　やばい！　戦術級の攻撃魔法だ。

勘違い男に逃げるように……　いや、まず佐奈を止めなきゃ。

「タイラー……」

「べっ、べつにオレが誰にコクっても会長には関係ねーだろ」

「ターザンメ　ウォウアリフ…」

弁解してる暇があったら逃げて！　そうじゃないと、命が危ない！  
というか、確実に、間違いなく死にます。

意志力を総動員して、硬直した身体を振り向かせて、振り向かせ

……

ぎゅぎゅぎゅぎゅ……

全身を軋ませながら……………

ようやく振り返らせて、佐奈を見ると。

組み合わせた彼女の両手の間には光の粒が集まり、淡く光り始めた。

それは最初は赤く、そしてオレンジ色へと輝きを強めていく。

「やめて佐奈！ 死人が出る！」

「…イーター！」

最後の力を振り絞って、佐奈の腕を押さえるのと呪文が完成したのは同時だった。

キュバツ！

勘違い男の後ろに半球状の結界が展開されると、その中を凄まじい閃光が満たした。

「こっ、殺す気かっ！」

結界が消えた後に残されていたのは、10メートルくらいのクレ―ター。

その中では、溶岩がふつつつと煮えたぎっている。

「この前も言ったでしょう？ 次に私の機嫌を損ねたら死刑だともまずい！ 次の呪文を唱え終わって……る？」

その時、予鈴が鳴り響いた。

「ふん、命拾いしたようね… みんな、転移しちゃいましょうね」

み  
よ  
ゝ  
ん。  
。



## 第4話（後書き）

佐奈ちゃんが使おうとした魔法は、この世界で知られている魔法の中では最大級の破壊力を秘めた広範囲呪文です。

……失敗してよかったあ

## 第5話

教室に入った僕は、そのまま机にうつ伏せになりながら死んでいた。今日は朝からいろいろなことが、あり過ぎです。というか、転移酔いです。

佐奈はある意味、規格外な魔力を持っています。

だから今朝のように古代の御技——今の世では失われている魔力消費量が大き過ぎて使えない魔法——特にあれは軍用の広範囲魔法で、魔導士が数人がかりでようやく1発という最終兵器だし。この転移魔法だって……

そういえば、今朝のは発動失敗したのかな？ まあ、いいか……

「おはよう瑞希」

そんな事を考えていると、誰かが僕に話しかけてきた。

「ああ、おはよう」

のろのろと顔を上げると、そこには親友の速水・大地が立っていた。

「せ、セーラー服かよ」

「似合う？」

僕の前でくるっと回ってみせた。

セーラー服に学生ズボンって……

まあ、違和感が無いというか、恐ろしいほど似合ってます。

「ついに男を捨てたのか？」

「やだなあ、これは王立海軍の水兵さんが着てるやつだよ。先週、一緒に買っただろ」

「……この前のイベントで買ったやつだよ。似合ってるね」

「でしょでしょ？ 瑞希も着てくればいいのに」

蜘蛛の糸より細い希望にしがみついている僕と、それなりに開き直った大地。

趣味も性格も違う僕達だけど、小学校のころから、体格的なコンプレックスがあった。

両親は栄養面で偏りがあるせいだと思っての事からか、僕達は身体に良さそうな色々なものを食べさせられた。

ザリガニが良いと聞けば、おやつ代わりに殻ごと食べさせられた。他にも煮干しとか牛乳とか海藻とか、薬草の粉末から何か特殊な岩の粉末とか……

最近は諦めたらしく、普通の食事だよ。一応、念のために言っとくけどね。

そのほかにも色々あったけど、同じ悩みを抱えた僕達が出会ってから友情が芽生えるのには時間は要らなかったと思う。

傷の舐め合いだとか思った人は、放課後に体育館の裏手にある庭園に来てくれるかな。

そこでちよつとO☆H A☆N A☆S H Iしよう。

先週の日曜日は海軍記念日だった事もあって、色々なイベントがあったのだ。

セーラー服は基地の中にある売店で買ったんだけど、僕はまだ袖を通していない。

「何かあったら学生服を持ってきたておいて、着替えりゃいいかな」

「そうそう。たまには良いんじゃない？」

「じゃあ、明日… 着てくるよ」

「そうこなくっちゃ！」

大地は僕を軽く抱きしめると、にこやかに笑った。

その瞬間、ざわついていた教室が一瞬にして静かになった。

## 第5話（後書き）

はい、男の娘です。

速水くんはただの女装少年ではなく、似合えば何を着てもいいと思  
っているし、実際に着こなします。

天城くんは、最後の一線は越えまいと思っていますようにですけど、ね  
……

## 第6話

教室の中が一瞬、静かになったけど、すぐに戻ったようだ。でも、女子の眼がハートマークなのは気のせいかな？

「ああ、あの二人、今日も絵になるわあ」

「私にもあの笑顔を向けてくれれば……」

「お持ち帰りしたい」「ねー」

なんか不穏な発言が聞こえたようだけど、ここはスルーだ、スルー！

「それより、どうしたの？　すごく疲れているみたいだよ？」

「ちよっと寝不足」

「星を見ていて時間を忘れた、ってところかい？」

「そういう訳じゃないんだけどね」

なんか寝た気がしない、というやつ。別に夜更かしをしたわけじゃないよ。

だって、昨夜は雲が多くて天体観測どころじゃなかったし。

まあ、なんというか、うーん……

「……いや、なんか夢見が悪くてさ。あと、昨日の午後って何かあったっけ？」

「何かって？　副会長が告白に来たくらいで、あとは普通だったんじゃないかな」

「そうだったっけか？」

「やっぱり疲れてるんだよ。明日はハイウインド様の所に行くんで緊張してたとか？」

「いや、それはない。どちらかというと、それはサボりたい」

「なっ、なんて事を言うんだ！　だめだよ、それは駄目だと思うよ！」

大地の目がヤバイ！

アレだ、熱病患者というか、アイドルに心酔する熱狂的なファンの目だ。

「いいかい？　ハイウインド様のお役にたてるというのは……」

ふう、ハイウインド様……か。

彼女の事を生ける半神というか、そんな感じで崇拝している人は結構多いです。そういう意味での世間様同意度はものすごく高いでしょう。

上品でおしとやかで、すごい美人だし、胸もこう、げふんげふん

……

たしかに、彼女は魔法全盛の旧王国時代にさえ、超越者とか大魔法使いとして名を遺していますし、政治経済軍事なんでもござれのハイエルフです。

いえ、間違っていないですよ？

ちゃんと記録も残っていますし、時代ごとの証人もバッチリです。

それは置いとくとして。1限は地学だったのですが。

「授業は中止だ。緊急の職員会議が招集されたんでナ、各自自習しておくように」

そう言うと、先生は教室から出て行った。

「なあ、これって校庭の大穴となんか関係あんのかな」

「あの大穴か。何でも底の方は溶岩だったらしいぞ」

「ちょ、ちょっと待ってよ。今朝何があったか、みんな……知らないの？」

「知らねえよ。いつの間にか出来てるから騒ぎになってるんだろうよ」

「大きな爆発か何かでしょ？ でも破片は落ちてないし、」

「えっ……？」

何か嫌な予感がするのは気のせいだと思いたいです。



## 第6話（後書き）

ハイウインド様って、うーん、どう説明すればいいかな。

熱狂的なファンクラブがあるというか、どちらかというと神格化：かなあ。

国民の支持率は、ほとんど100%という絶世の美女なんですけどね。

## 第7話

はてさて。

2限目の授業は普通に始まったわけですが、これがまた拷問というか何というか……

本来なら体育の時間なのですが、いきなり校庭に直径10メートルの大穴が出来てしまったので、朝一番で開かれた職員会議で当分は中止という事が決まりました。

強力な攻撃魔法が使われた結果、という事で警察が来て現場検証をしています。昼からは王宮魔導士が何人か調査に来る事になっているそうです。

窓から見てみると、王宮騎士団の重装歩兵が穴の周りを固めているばかりか、飛龍も何頭か飛んでいます。

……やっぱり、佐奈のアレはやばかったと思います。

それはいいとして。というか、体育つぶれたよ。きやつほう！

授業が中止になれば、持久走と、ハードな筋トレが待っていた事でしよう。

金髪碧眼のマッチョ……もとい、アンディ・堀井……先生いわく、何をするにも必要なのは強靱な肉体と体力だそうです。

さすがはドワーフ族というところですか。

「……というわけで、イエルドゥを王都にしていた旧王国時代には、一般的には種族間の交流が希薄であったと考えられていたが……」

代わりの授業は歴史学。

これからの1時間半は気を抜く事ができません。

マスイード先生はハーフエルフで、元軍人です。本人いわく『予備役召集に応じて従軍したエツナン戦争から生きて還ってきた』そうですね。

終戦協定が結ばれたのは50年くらい前の話だったと思う……教科書の年表を見ると…… あ、あったあった。52年前でした。

「はいそこ、赤色戦争の終戦の直接の原因は何だったかな？」

「ペイ・ジルーインの戦いです。太陽爆弾が戦争に使われた最後の戦闘でした」

「うむ、都市を一撃で消滅させるなど、今では存在すら疑われている兵器だ。よく出来たな、座ってよろしい」

ふう、やれやれ……

そこそこ高齢で大きな声が出ないという事もありますけれど、それだけに静かな声で淡々と授業を進められて、眠るなどというのは無理というか、拷問というか。

でも、寝るわけにはいきません。

「む…… そことその男子っ！」

びすっ！ ぶしゃ！

「うぐあ！」 「げふっ!？」

予備動作なしで投擲されたチョークは、隣でうつらうつらしていた男子の眉間のまんなかに命中…… うわあ、今日の威力はすご。二人とも血がにじんでる。

「目が覚めたかね？」

「はい」

「二人とも廊下に立っていないさい。……では、授業を続けるとしよ

うかね」

寝たら、こうなります。

## 第7話（後書き）

ハイエルフとかエルフとかドワーフとか。

人間と一緒に普通に暮らしています。こういう世界もありじゃないでしょうか。

次々回あたりに獣人が出てくる予定です。

## 第8話

教科書に書かれている以上に旧王国時代については、かなり勉強したというか、ハイウインド様に憶えさせられたというか。

実際に教科書に書かれていないような内容ですが、すごく便利なものでした。

僕と大地が持っている護身用のデリンジャーもそれを応用したものです。

それにしても、です。

ハイエルフの寿命って、どのくらい長いんでしょう。

見た目はお母さんという勝負なんですけど。

マスイード先生の講義は、まだまだ続きそうです。時計を見ると……あと30分も残っています。うっく、時計なんか見るんじゃないかった。

きつちりとわかっている内容なので、べつに授業なんか聞かなくても構わない内容だけど、眠っていればロリンの二の舞だもの。

……あと20分だ。

意識が遠くなってくるし、おなかが空いてきたし。

……ちょっと復習しておく。

旧王国時代一つ前の世界は、コーキとか西暦と呼ばれていたそうです。

そして、西暦時代の終わりから、旧王国時代が始まるまでの期間については、歴史学上の最大の謎とされる『空白の時代』です。

一つ前の世界について、普通に知られているのは、おとぎ話です。

記録があるのは世界中が戦場になった戦争があったという事くらいです。王都トゥンクインではジル・ムインとムイン・スユという二人の武将が血で血を洗う対立が日常の出来事だったとか。

天空の遙か彼方にある星の世界に旅立とうとして、神の怒りに触れた結果、世界は滅びかかったとか何とか。

詳しい事は旧王国の歴史書に書いてあるらしいんですが……

王宮の宝物室に保管されているので、誰も読んだ事ありません。

そんな事を思いながら、校庭に目を移すと、佐奈があけた大穴の復旧工事が始まっているようです。それを見ていて…… 何か大切なことを忘れていたような気がします。

ふと黒板に目を戻すと、先生が黒板を消しながら、

「……と、いう事で今日の授業はここまで」

「きりーっ！」

「礼！」

「ああ、天命の飢饉については宿題にするので、各自調べておくように」

先生は淡々とした口調でそう言うので、教室から出て行った。

それと同時に、終業のチャイムが鳴った。

あゝ、おながが空いた。とにかく、食事にしよう！

……あれれ？ 弁当箱の中身が……

「まあ、たまにはこんな食事もいいかな」

弁当箱の中に入っていたのは、缶詰2個と乾パンその他でした。ぶっちゃけ、これはミリタリー・レーションで、栄養満点だけど

味は微妙。

保存食料よりはずっとマシ… って、この缶詰当たり。は美味しいやつでした。

よかったあ。

昼休みは2時間： 今日は佐奈も来る事が出来なんでしょう。生徒会も今朝の件でいろいろあるらしいですから。

ま、屋上にでも行ってみよう。

天気もいい事だし。



## 第8話（後書き）

この世界の歴史を軽く説明する回でした。

## 第9話

軍用レーションの良いところは後片付けが楽な事だと思う。

さすがに空き缶までは無理だけど、包み紙や食器は地面に埋めて半年もすれば、土になってしまうという優れものだし。

ぶっちゃけ畑に埋めておけば、肥料にもなるという環境にやさしい材料なのだ。もっとも、こういう材料でも使わなければ、騎士団とかが大勢で動き回る場合、行った先々でゴミの山が出来かねないもの。

「おだやかな天気だなあ」

あたたかい陽射し、風も吹いていない。

雲ひとつない青空には、竜騎士が空を舞い……

これは、ちょっと珍しいかも。

ざっと見渡した限りでも10頭かい竜が飛んでるし、中には滅多に見ることができない火竜も混ざっている。

「……竜騎士ならともかく、火竜が飛んでいなければ、か」

火竜は、まあ、読んで字の通りだし。

……まあ、いいか。

食べ終わったレーションの包みを片付けたら、ぼけーつとするだけです。

いつもなら来るはずの佐奈がないのは、校長室に呼び出されたからです。

……名前も知らない校長先生、静かな昼休みをありがとうございます。今だけは心から尊敬します。

ごろりと仰向けに寝転ぶと、この時期にしては珍しく絹雲が流れてゆく。

入学式から半月も経っていないからだけど、中学生になったという気がしないなあ。

クラスの半分くらいが小学校からの持ち上がりから、こんなものかな……

ほのぼのしていたら、フェーリス・加藤があらわれた。

「やあ、天城クンじゃニヤいか。相変わらず可愛いねえ」

「グーで殴っていいか？」

「この姿を見ても、果たして殴れるかニヤ？」

「う、つく… 卑怯なヤツ……」

彼は人化を解くと、大きな猫の姿になった。

純白の毛玉というかペルシャ猫を大きくしたような、とにかく、そんなものを想像してもらえばいいと思う。毛が長いのは本人に言わせれば、先祖返りの結果だそうだけど、ふかふかだし、これはこれで良いんじゃないかな。

「ま、いっか」

「そうそう。可愛い事は良い事ニヤ。細かい事で腹を立てるのは人間の悪い癖ニヤ」

そう言うと、加藤は身体を巻きつけてきた。いつもと違ってほのかにフローラルな香りがする。使っているシャンプーを変えたのかな。

「なんか良い匂いがする」

「花の匂いは嫌いじゃニヤいけど、身体につける匂いじゃないニヤ」

「シャンプー変えたの？」

「担任の先生に香水をかけられたせいで変な匂いになっただけニヤ。」

『ネコとはいえ身だしなみは大切』とか言われたニヤ」

……はあ、それは災難なことだ。

## 第9話（後書き）

ネコマタが出ました。

本来は人家で長く飼われているネコがネコマタになると言われています。

作中では名前だけを使いましたが、実際には獣人とかワーキャットです。

## 第10話

ネコマタが人間社会で生活しようとすれば『ヒト型』を取る事になるけれど、本来の姿ではない以上、くつろげるものではないんだろうね。

「……そういえば、さ」

「どしたのかにゃ？」

「鎮守の森って、初めからああったかな？」

「そう言えば、最近は遊びに行かなくなったニャあ。で？」

学校の西側には鎮守の森がある。鎮守の森というからには、当然のことながら小さいながらも神殿があるし、一柱の武神が祀られている。

そしてその中ほどにある小さな丘だけど、高さは10メートルくらいはあるので、校舎の屋上からよく見えるのだ。

その先には高校があり、クバツに向けての街道が… って、今はいいか。

「なんか丘の形が変わったような気がしたんだ。近くにあったクスの木が倒れちゃったせいかな。ずいぶん太い木だったから、樹齢もすごいんだろうね」

「あの木は古かったよー 1000年生きてたって、ばーちゃんが言ってたニャ」

「秘密基地なんか作るんじゃないかな」

「爺様が森の神様をお願いしてあるニャ…… お供え物もバツチリなのニャ」

「お団子や飲み物とか？」

そう言えばこんな時のお供え物って、どうすればいいんだろ。  
鎮守の森って、神様のいるところだもの。ホントはこんな事をしたらダメなんだと思うけど、なんか… こう、居やすいんだよね。  
お供え物をしてるなんて知らなかった。  
変なところで迷惑かけちゃったのかな。

「食べ物じゃ御利益が薄いので、天城クンの庭に干してあったばん  
つを……」

……ちよつと待った。

いま、聞き捨てならない単語が混ざってたぞ。

「……犯人はおまえかあああっ！」

「たった今思いついた嘘ニャ。もしかしてホントに盗まれた？」

「思い出したくもない……」

いつもと同じようなとりとめの無い与太話だけど。

……いつもと同じ？

いやちがう。

何かが違うような気がする……

「可愛いというのも大変なんだにやあ……」

加藤は、大きく欠伸をすると丸くなった。

「やっぱ疲れてるんニャ。そういう時は昼寝が一番ニャ」

「そう、かな… 昨日の記憶が飛んじやってるくらいだから」

「…あの副会長のアタックは尋常じゃなかったからニャ」

まあ、いいか…… って、加藤！ 起きろ、起きてくれ！  
僕は抱き枕じゃな……

まあいか。

もふもふだし、あったかいし。

幸いな事に、佐奈も来てないし。

……おやすみ。



## 第10話（後書き）

鎮守の森…… 神社の周りにある森というか林というか。

明治神宮のそれは、まだ完成していないとか。なんでも100年計画を組んでいたとか。

今の日本で100年先の事を考えて計画を考えるなんて…… そんな能力あるわけないですね（笑）

## 第11話

……………暑い。

身体がどろどろに融けそうだ。

そうか、屋上で昼寝をしているうちに加藤の抱き枕にされていたはずだけど……

なんで加藤が増えているんだ？

「にゃあ」

……………にゃあ？

よく見たらネコの群れだ。どこから集まってきたんだろう。10匹近くのネコが僕たちの周りにいる。おなかの上に乗っているのは子猫だ。首に赤いリボンを巻いているところを見ると、どこかの家で飼われてるんだろう。

ンな事はどうでもいいや。

この陽気でネコまみれになると、さすがに暑い。加藤ががちりと抱きしめてるから身動きもとれない。

ええと、困ったな。

「やあ、瑞希。暖かそうでいいねえ」

「どうでもいいけど助けて」

「やだ」

「暑い。蒸れる。このままではしむ……」

大地は意地悪そうな笑顔を浮かべながら言った。

「大好きなネコに囲まれてるんだから、少しぐらいは我慢すれば？それとも佐奈先輩と一緒にの方がよかったのかな？」

「……返事に困るような質問はやめてよ」

「まあ、いいけどね。ちょっと手伝ってくれる？」

しゃがんだ時にふわりとスカートが…… スカート？

セーラー服は今朝のままでもいいとして、なんでスカートなんかは  
いてるの？

いぶかしがるような僕の視線の意味に気づいたように言った。

「僕のズボンは今頃…… 路川さんが穿いてると思うよ」

「どうしてこうなったの？」

「みんなで弁当を食べてる時に、ズボンにお茶をこぼしちゃってね」  
というか、わざとこぼされたんだろ。

で、あーなって、こーなって…… うん、大体のところは想像で  
きた。大地には悪いけど屋上で弁当を食べてて正解だったみたいだ  
ね、うん。

「……干してる間に、というところかな。じゃあ、そのスカートは  
？」

「もちろん路川さんのだけど」

やっぱりそうか。どうせ着替えようとしたら体操服を隠されてて、  
だろ。

「大地も可愛いからニヤ。二人ともホントにオスなのか不安になっ  
てきたニヤ」

「ねっ、ねえ、落ち着いてよ…… ね、ね!？」

「ふ、ふふふふ……」

黒いオーラを纏った大地は懷からデリンジャーを取り出した。手  
のひらに収まるU字型のそれには、小さな魔法陣がいくつか記録さ  
れている。セクターで魔力回路を切り替えて、魔力を流せば、簡  
単な魔法を発動させる事が出来るというものだ。

「やめてええ！」

「うにゃ！」

大地の攻撃は加藤が尻尾をふわりとさせただけで消え去った。

「護身用の初級魔法だからニャあ」

ふうう、よかった。

不発か。

今朝からこんなのはっかりだ……………

## 第11話（後書き）

デリンジャーです。あまり武器に詳しくないので名前はテキトーです。

タイトルは憶えていませんが、月が宇宙を放浪していて、そこにあった基地に人間がまだ残っていて… という昔の映画を見た事がありますが……

基地のメンバーが使っていたレーザーガンが、全然ピストルっぽくなかったんですが、それだからこそ使ってみたいデザインでした。

## 第12話

ズボンは簡単に返してもらおう事が出来た。

その方法は…… 言いたくない。

「二人とも災難だったニャ。匂いはオスだけけど見た目はメスみたいだから仕方がないし、こればかりは運命だと思ってあきらめるしか無さそうニャ」

「わかってるけどね、それでも何かなあ」

「僕は別に構わないよ。自分に似合う服、着こなす事が出来る服なら構わないと思うけどなあ」

「どうでもいいじゃニャいか。そんな些細なことで悩んでいたらストレスで全身の毛が抜けてしまうニャ」

加藤は少し離れたところで丸くなったまま、使い魔に餌をやっている。まあ、それはいいけど、不思議な光景というか、違和感だ。

あいつの使い魔は、事もあるうにカヤネズミだもの。小さくてかわいいしどこでも見かけるし、バッタやイナゴなどを食べてくれる益獣だけど、ネコがネズミを、ってね。

「そろそろ人化しておいた方がいいんじゃない？ あと30分で予鈴だよ」

「あと30分もあるニャ」

「そう言えば、今日は佐奈先輩が来なかったね」

「校長室に連行されたまんまだニャ」

佐奈が校長室に呼び出して、今朝の一件がばれたかな？

「そういえば、午後の授業は中止になるらしいニャ」

「へえ、なんでだろ」

「校庭にいつの間にか出来た穴とか、鎮守の森に異変があったとか…… だってさ」

「そういう事。細かい事は話せないけど、ね」  
「えっ!？」

上の方から聞こえた声にびっくりして見上げた先には、地味な国防色に塗られた箒が浮いていた。正確には箒の両側に籠をつけて二人乗りにしたタイプだ。

「ありがとう、大尉。帰りは自力でなんとかするわ」  
「はっ!」

母さんを下した箒はそのままどこかに飛んで行った。

「どゆこと? 今日ハ訳のわからない事でいっぱいだよお」  
「ん?」

「瑞希の顔を見に来たのと、鎮守の森で異常な魔力が放出されたから、その調査もね」

「主席王宮魔導士の母さんが?」

「そう。調査は陛下の勅命でね。魔力の種類がナウパウムの塔のと同じようなタイプのものだと言えはわかるでしょ?」

それを聞いて、王国の戦力を総動員させたのか分かってきた……  
ような気がした。

喪われた記録を見ている僕は知っている。塔の出現と同時に人類は滅亡寸前にまで追い込まれた事を……

「竜騎士が総出でこのあたりを警戒してるし、王宮騎士団はいつでも出動出来るような態勢で待機中。悪いけど今日は帰れそうもないから、ご飯は適当に食べてね」

そう言うと、母さんの姿は校舎の中に消えた。

午後の授業は予想通りに中止になりました。



## 第12話（後書き）

ようやく1日目が終わりました。  
のんびりし過ぎ、でしょうか。

## 幕間／佐奈の昼休み

午前中の授業は、集中できなかった。

つい感情的になって使ってしまった攻撃魔法が失敗したため。実際には発動していたはずなのに。そして、石橋が病院に担ぎ込まれたこと。

私ではない誰かが使った氷結の魔法のせいだ。

そして何より気になるのは、みんなの記憶が、曖昧になっている事。

共通しているのは、昨日の午後から今朝にかけて…… なのよね。

なんだかんだで昼休みになった。

とりあえず気持ちを切り替えて、と。

瑞希くん、今頃はお弁当の包みを開けて、ビックリしているんじゃないかしら。

だって、中身はミリタリー・レーションだし。

これは乾パンとチューブ入りのマーマレードと金平糖に、おかずが付いているという、栄養満点だけど味は微妙というか、保存食料よりはずっとマシという程度のものだから。

あくまでこれは普通一般のモノだからね。

でも、今回のレーションは特別製。

この前の海軍記念日のイベントで、付属のコンロで温める缶詰がセットになっている陸戦隊用のものを見つけたので、使ってみたわけ。

中身はポークシチューと、ソーセージのスープ煮だ。

「……でもさすがに意地悪だったかな」

本物のお弁当を取り出すと、1年生の校舎にレッツg『連絡しま

す。生徒会長は、ただちに校長室まで来てください。繰り返します……』ちよつと待って？

やな校内放送を聞いたような気がする。

「さくな？」

「なあに？」

「また呼び出されちゃったわねえ？」

「何もこんなタイミングで呼ばなくても、って思っちゃうけどね」「仕方がないでしょ。お弁当は校長室に持ってくしかないわねえ」

そう言って笑っているこの子はちよつと苦手。

名前は愛川・文香……あいかわ・ふみか。私よりも頭一つ小さくて、茶筒よりもスレンダーな体型という可哀想な人です。

それを補って有り余るのは、その行動力でしょうか。

実行力というか、とにかく元気な姉御肌。

「今度は何をしたのかな？ おねーさんに言ったんさい？」

「さて何の事やら、お代官様。かいても見当もつきませぬ」

「あんたが校長室に呼び出される時って、ぜくんぶあの子がらみでしように」

「と、いうより…… いつ出来たんでしょね、あの穴」

ためしにボケてみた。誤魔化せればラッキー♪

「えええええ？ あれ佐奈がやったんじゃないの？」

「だいいち出来たのはいつの事なのよ」

「そういえば、そうね…… 朝は無かったような気がするし……」

やっぱりだ。文香の記憶も曖昧になってる。失敗に終わった魔法とはいえ、それなりに音や光は出ている。陸上部の朝練で校庭にい

た文香が気が付かないわけがない。

というか、きっちり注目を浴びていたような気もするし。

「陸上部は朝練があったでしょ？ 気が付かなかったの？」

「……そういえばそうね。あんた達は、いつも通りいちやつきながらの登校だったし」

「そういう事。じゃあ、ちょっと行ってくるわね」

## 幕間／佐奈の昼休み（後書き）

瑞希くんが屋上でネコまみれになっている時の別視点でした。

## 第13話

今日は土曜日。生徒会のメンバーは、来月から始まる体育系クラブの新人戦の関係でお祭り騒ぎになっているらしいけど、佐奈には悪いけど僕たちは生徒会じゃないし。

ひゃっほう！ 学校休みだ、遊びに行くぞう！ という夢は碎け散りました。

幸せは長続きしなかったみたいです。

『コンイチワ』『アイガトオ』

「ちがーう！ もう一回」

ちなみに目の前にいるのは、マルシア先生です。ヤポネス系ラジelpo人2世と言われる世代で、むこうに移民した人の子孫という事になるそうです。

ヤポネス人の血が表に出ているせいか、見た目はラジelpo人らしくありません。

黙って椅子にでも座っていれば、生粋のヤポネス人と区別できないかも。

ネイティブに言葉を教わるというのは、文字通り『生きた』ラジelpo語を教えてもらえるという事で、進学試験の時にしか役に立たないと揶揄される教科書の内容とは別次元のお話です。

こういうのが好きな人には、貴重なチャンスかも知れませんが……

ぶっちゃけ外国語は苦手です。今まで使ったことがないんですから、発音だってカタコト言葉になるのは仕方が無いと思います。

ラジelpo語はヤポネス語とは全く別の言葉で、文字体系から違う

んですから。

それを勉強しなくっちゃいけないなんて、僕たちは不幸です。

『コバーンワ』 『サヨオオナ』

「もう一回！」

平たく言えば補習ですが、何もこんな時にやらなくてもいいと思います。

出席しているのは、僕と大地だけだし。

『マホーノコトゝバ』 『フーシツギのコトゝヴァ』

「うがあああああああ！」

もう少しかな？

僕は大地に目くばせをした。

口の端だけをにやりとさせると、

『ポポぽポーン』 『ポポポぽーン』

「ふ、ふふふふ……」

うん、綺麗にハモったね、うん。 って、やり過ぎたかな？

「ちよつとヤバいかな？」

「そんな感じだね……」

先生はうつむいたまま、細かく肩を震わせながら何かに耐えているようだ。

と、ざわりと空気が揺れた。

「あなたたち…… お仕置が必要ネ」

「え？」

「やっておしまいなさい、アレックス！」

「どええええええ!?!」



### 第13話（後書き）

まあ、何と言いますか……

やっちまった感がありますけど……

まあいいか（笑）

## 第14話

教室の後ろの壁からは、無数の触手が生えている。何か、いや、アレックスが壁の少し手前の空間に出口を作って、そこからこちらを窺っているようだ。

姿かたちを一言で表現すればイソギンチャクだけど、そこから生えている触手は何本あるのか分からない。変なものを召喚したなあ。

「どっ、どうする？」

「逃げよう！」

「逃がさないわヨ！ あなたたち」

ひゅんっ！

行く手を遮るように、一本の触手が身体に絡み付こうとした。が、身体に当たる寸前の場所で、鈍い音とともに、触手が弾き飛ばされる。

……あれ？ 触手が飛んできたあたりの空間が濃い緑色に波打ってる。池の中に石を放り込んだ時のような感じだ。

ナニコレ？

濃い緑色の波紋の向こう側では、触手は天井に当たってばらばらに砕け散っていた。

よく見ると、黒焦げどころか完全に炭になっている。燃え残った？ ところは、うねうねと動き回ってる。

「防御結界とはやるわネ。これならどうかしら」

今度は無数の触手が襲い掛かる。

だが、それは途中で凍りついたまま動けなくなっていた。

「……助かったよ」

「どういたしまして」

大地がデリンジャーを使ったようだ。

それも普段は麻痺の魔法が発動するようになっていたはず。そりゃあ氷結の魔法が組み込んであるけど、よくもまあ咄嗟に当てる事ができるなあ。

「じゃあ、休憩という事で」

僕もデリンジャーを取り出すと、先生に向けて引き金を引いた。

「のおおう！」

2本の光条は、先生の身体に吸い込まれた。

.....

.....

.....

「ほんっ、とに、あなたたち…… もウなんかどうでもヨくなってきた……」

マルシア先生は回復用のポーションを飲み乾すと、がっくりと肩を落とした。

「……………悪ノリし過ぎたかな？」

「先生？」

「何かしら」

「校庭の穴についてですけど… 避難命令が出ていませんでしたっけ」

そういえば校庭の穴には、未反応の魔力塊が埋まっているという話ですけど。

「ああ、それなら心配しなくてもいいわヨ」  
「え？」

「そろそろ解除されても不思議ないし」

「なんでそんな事が分かるんですか？」

「うふふ、それは秘密」

## 第14話（後書き）

この世界でも土曜日は学校はお休みです。

昔はお昼まで授業があったと聞いたことがありますけど、それって都市伝説のたぐいでしょうか。

## 第15話

先生はびよん、っと立ち上がると、にっこりと笑った。

「そうだ、明日はせっかくの日曜日だし、どこかに行かない？」

日曜日は休みって言っても、それなりにやる事があるんです。今日だって歴史の宿題とか商店街に新しくできたゲーセン行くとか、佐奈の買い物に付き合うとか。

で、明日は明日でクバツに行く用事があるし。

ほら、暇じゃない。だから……

「……休みじゃないです」

「僕もマスイード先生の宿題が終わってないです」

「なあんだ、その位なら大丈夫よお。何とかなるって」

そんな安請け合いされたって……

マルシア先生はルージュで縁取られた口元を吊り上げて、にっこりと微笑んでくださいました。

「天命の飢饉なら、私のノートを見せてあげる。言っておくけど丸写しだけは駄目だからね。あの先生の授業は私の時から変わってないから、それで何とかなるでしょ。」

天城くんはハイウインド様のところでしょ？」

「そうですけど……」

「クバツのお屋敷になんて、国王陛下だって年に何度も招かれないのに……」

遠いところを見るような表情でぼやいた。

「そうなんですか？」

「そうなの！ これはとても名誉なことなのよ」

「僕の場合、小さい時からクバツに行くと、必ず寄ってたから、いまいちピンと来ないんですけど…… というか、寄らないと後でいろいろ言われるし」

「それだけ寵愛を受けているという事でしょ」

「寵愛というより溺愛って感じで嫌なんですけど？」

美味しいものが食べられるとか、天体観測で夜遅くまで起きていられるとかはいいけれど、着せ替え人形にされるんだよね。半ズボンとかならいいけど、この前のようなふりふりのいっぱいいた服は…… 大地なら喜んで着そうだけど。

男子には男子なりの服装というものがあると思うんだ……

そんな事を考えていたら、奇妙な視線に気が付いた。

というか、僕を見つめる二人の背後には不気味なオーラが渦巻いている。

「そんな事を言っていると…… いいの？」

先生の視線の先を追っていくと…… うっ、大地の目が怖い。

重苦しい空気というか、二人の出すオーラに押しつぶされそうだ。

「……よっ、よく考えてみれば、これはこれで幸せなのかも」

「ようやく分かってきたようね」

「三国一の果報者って、僕のためにあるような言葉ですね」

「そういう事よ」

そう答えたとたんに、空気が軽くなった。

……ふう、長いものには巻かれろ、ってこういう時に使うんでしょうね。

でも、それと外国語は別だと思うんですが……

「それは置いとくとして、外国語が出来なくても死ぬわけじゃないのに……」

どうして外国語なんか勉強するんでしょうね。普通に暮らしている分には使う必要はほとんどありません。そういう時のために翻訳の魔法というものがあるのに。

マルシア先生は、がっくりと肩を落とすと盛大にため息をついた。「個人的にはどうでも構わないけど、周りの人はどう思うかしらネ。ハイウインド様のお気に入りがお馬鹿さんでハ、教師の立場が無いのヨ」

ため息をつきたくなるのは僕のほうです。

「とにかく、ペースを上げるわよ。はい、じゃ次は教科書8ページを開けて！」

補習授業は昼までみっちりと続けました。

もう、脳みそが融けそうです。



## 第15話（後書き）

英語なんかキライダ……

ホシユウジユギョウナンカ、モットキライダ……

「やるけど参加する？」って聞かれて、「はい！」って返事したのは私ですけどね。なんか納得のいかないGWでした。

## 第16話

なんだかんだで補習授業が終わりました。

やっぱり外国語なんか嫌い！　という……　え？　え？　なんでここに？

「あらあ？　何をたそがれてるのかなあ？」

「げ…　ハイウインド様。どうしてここへ」

「エスターでいいって言ってるでしょ？」

抱きしめられるのと同時に、頭にのしかかるずしりとした感触。人類の至宝といつて羨ましがる人もいますが、いまの僕にとっては凶器そのものです。

「やめてエスター、重い！　背が縮む！　息が出来ない！　死ぬ！」

「はいはい」

彼女はくすりと笑うと、じたばたともがく僕を解放してくれました。

「今日は休みじゃなかったの？　佐奈ちゃんは生徒会らしいけど」

「はい。副会長が急病で入院したので、大変らしいです」

「ふうん、『急病』ねえ。そうなの？　それはまた大変ねえ（にっこり）」

「キノウノアサ、ツウガクノトチュウ、キュウニチヨウシガ、ワルクナッタソウデス」

にっこり笑うのはいいけど、なんかヤバそうな雰囲気があります。

「ああ、たしか三浦クンと言ったかしら。彼なら…　今ごろ退院しているはずよ」

「……ソレハコウウンデシタネ」

「生きていれば腕の一本や二本もげたくらいまでなら、どうにかなるものよ？ それに今回は全身に凍傷を負っただけですもの。楽勝よ」

佐奈の規格外の魔力は先祖帰りですが、ここまでの回復魔法は発動できません。

にっこり笑うエスターも、やっぱり規格外。

古代の御技をすべて使いこなすのは、ハイエルフだから……やっぱり規格外かな。

たしか死者でさえ復活させる事が出来ると聞いたような気がします。

いやいやいや。

そんな事じゃなくて。

ひよっとして昨日の一件については……凍傷で入院？  
ちよっと待って。

昨日の朝は、副会長に告白されて、佐奈が攻撃魔法を使ったけど不発、だったよね。

その後は昇降口まで転移したはずだね。じゃあ、誰が副会長を……

「……？ どうしたの？」

「いいいいえべつに」

「まあ、疲れるわよねえ」特に佐奈ちゃんは

「副会長さんがいませんからね」今は部活の新人戦とかがあるらしいですから」

「そうでしょうねえ。ましてあの子ったら戦術級の魔法を使っているんですもの。体力はともかく魔力もすっからかんでしょうね」

う……

「幸いにも、私の結界が間に合ったから、大きな損害もなかったし死傷者もなし。地元の工事屋さんの努力で校庭の穴は明日に元通りになるそうよ。それにね……」

その結界のおかげで、このあたり一帯は荒野になることは免れましたね。

そうですか。発動した戦術級魔法を結界作って封じ込めたんですか。古代の御業のすごさが、よくくわかったです。

でもって、広範囲に記憶が曖昧になる類の魔法を展開してみた、と。

でもなんで、ここにいらっしゃるんでしょうね。

タイミング良すぎでは？

## 第16話（後書き）

可愛いという事は正義です。

正義の前では性別なんか関係ありません。

だから瑞希くんはハグられる運命にあるわけです。

ふふふふ……

## 第17話

エスターは広域魔法で昨日の一件を『なかったこと』にしてくれました。情報攪乱というか、その手の魔法で、ここ数日の記憶が曖昧になってしまうものらしいです。

ある意味では運がいいというべきかな。

「昨日はびっくりしたわよー 王宮で朝議を始めようとした矢先に、戦争でも始まりそうな魔力反応だもの」

「王宮にいたの？」

「アルマが至急の用件だって、早馬を寄越したのよ」

「国家の一大事って感じがするけど」

「鎮守の森から奇妙な魔力波動が感知されて、結界が張り巡らされただけなのにね」

「じゃあ、父さんと母さんが帰ってこないのもそのせい、ですか？」

「あの二人は別の用事があるらしいわよ」

ええと… 聞き飛ばしていましたけど、アルマというのは国王陛下の事ですよね。

正式にはアルマレーロ・ヴォウ・トゥティア・オルス・ドウーラという長ったらしい名前のなので、親しみを込めてトゥティアの殿様と呼んでいますけど。

それでも、い、いくらなんでも国王陛下を呼び捨てというのは……

「たしかに国のトップだけど、私からみれば、今でもかわいいアル坊やなのよねー」

国王陛下って、そんなもんなんですかね。見かけこそ平凡ですけど。たしかに背広着てそこらを歩いていれば、ただの50過ぎのお

っちゃんにしか見えませんけどね。  
でもこの国で一番偉い人で……

「あの子ったらね……」

彼女は、出るところは出て、締まるところはとことん締まっている綺麗なお姉さんですが、実のところ、とんでもない年寄りです。それなのに、『老化が止まっているのでは?』と言われるほどに若い容姿と美貌の持ち主だったりします。

楽しそうに国王陛下の幼少時代を語るエスターですけど。あの時代をリアルで経験しているからこそ、楽しい思い出話なんですよ。うね。

こうやって、いくつもの時代を過ごしてきたのでしょうか。

そういえば何年か前に赤色戦争で活躍した事があると言っていました。それが新王国時代の初めごろの出来事だと知ったのは、つい最近の出来事です。

これはこの前の小テストで出たし、ちゃんと満点取りましたから間違いないです。

それにしても、この前会ったエルフのお爺さんは820歳だったけど、外見も普通にお爺ちゃんだった。赤色戦争はお爺さんが生まれる前の出来事だよね……

エルフとハイエルフの違いはあるにしても、ここまで極端だと反則じゃないかって思うことがあります。

で、まあ結果から言えば、赤色戦争は……

「……209年に赤色帝国がコレア半島に侵略の手を伸ばしたのが始まりね」

「こっ、心を読むのは反則だと思います」

「だって言葉に出てたもの」

「えっ？ どのあたりかれでしょうk……」

「うふふふ……」

や、やばいかな？ エスター様、笑顔が素敵です……



## 第17話（後書き）

鶴は千年… と言いますが、ハイエルフの寿命ってどのくらい長いものなんでしょうね。

エルフの寿命は千年、という話を聞いたことはありますが、ね。

## 第18話

エスターが大輪の薔薇が咲き誇ったような笑顔を浮かべる時には、ロクなことはありません。というより、確実に被害をこうむります。一方、大地はというと……

「ああ、ハイウインド様の笑顔……」  
確実に魂が抜けかかっているな、うん。目が逝っちゃってます。

で、僕はというと、いつの間にか背中からムギュッと抱き締められています。

でも、僕の首に絡めた腕は何を意味してるんでしょうか？

「とりあえずクバツまでは転移魔法で帰りましょうね」

「え？　で、でも……　王宮の用事って、国王陛下の……」

「とりあえず、状況的には様子見だし、私も装備を取りにクバツに帰る途中なの」

校庭の穴は埋め戻しの手配が済んだから、避難命令の根拠にならなくなったし、鎮守の森については……　たぶん機密事項なんですよ。

「あなたも家に帰っても一人じゃ寂しいでしょう？」

「別にそんなことはないです。レポート提出も待っているし……」  
「レポート？」

「天命の飢饉について、次の授業までに提出する事になっています」  
よし、大地。ナイスサポートだ！

「そ、そうなの。マスイード先生、結構厳しくて……」

「……でも、ハイウインド様のお召しは全てにおいて優先だ、って  
思います」

「おっ、おい……」

「嬉しい？ ハイウインド様にご足労いただいているのに、まさか  
断らないよね？」

だっ、だいちいゝ

親友のお前だけは分かってくれると思ってたのに。  
にっこり笑いながら近づくなあ！

「決まりね、一緒にに來なさい」

「ゑっ？」

「今夜は快晴だそうよ？ もちろん明日の晩も。好きなだけ夜更か  
し出来るわよお？」

「でっ、でもお……」

「来るわよね」

さりげなく腕に力を入れないで……

「ぐえっ！」

首に回った腕えええ！ 絞まるっ、もろ気管に入ってますっ！

……タ・ス・ケ・テ……

おい大地、そこで「死んでもいいからハイウインド様のお役に立  
ってこい」って、さわやかな笑顔で親指立てるなあ！

「そうそう、ハヤミ君といたたかしら？」

「はっ、はいっ！ 速水大地ですっ」

「この場であった事は内緒にしておいて頂戴？」

「はっ、はい！ もちろんでひゅ」

うけけ。大地のやつものすごく緊張してる。いわゆる直立不動と  
いうやつ、だ。

「お願いね？」

足元には、いつの間にか魔方阵が淡い光を放っています。  
そういえばエスターが呪文を唱えた事って、ないなあ。えいっ♪  
って感じで魔法を使ってる。ような気がする。  
転移魔法って、仕える人があんまりいない上位魔法なんですけど  
ね。

「じゃあ、瑞希ちゃん、行きましようか」

みょん♪

## 第18話（後書き）

魔法の分類って、結構難しいです。

## 第19話

というわけで、エスターの屋敷にいます。

継ぎ目のない石造りの建物は屋敷というより、お城と言った方がいいかな。地下にも部屋がたくさんあるし。

全体的なイメージは立体的な迷路という感じ。慣れないと、遭難しかねません。

というか、遭難したことがあります。

まあ、それはおいといて。

彼女の転移魔法は母さんのそれと違って、転移酔いもなし。と、いう事で、エスターから借りた資料でレポートを作っている間に彼女は王宮でのお仕事です。

色々な荷物を馬車に積み込んでいる所を見ると、それなりに大仕事なんだろう。

つか、このメイドさん凄すぎ。

あんな大きな荷物を軽々と持って歩いてる……

というわけで。

無事にレポートも完成して、日も暮れて。夕食の時間です。

豪華なシャンデリアに照らされた食堂には、細長いテーブル。

ふんだんにレースをあしらった絹のテーブルクロスが敷かれている。

その上に鎮座しているのは、見た目も美しく盛り付けられた豪華な料理。

それは、見ているだけでも空腹を誘うようだった。

……なんて、そんなモノが普段の生活に登場するはずがありません。

もうとつくに日も暮れたというのに、天井の一部が白い光を放っているせいで、部屋の中は真昼の明るさです。

でも、すごいのはそれまでです。

タタミ・マットが10枚ほど敷かれた部屋に背の低いテーブル。このように、椅子を使わない生活というのは、古代からのジャポネ人のライフスタイルだそうです。

正座って、足がしびれてくるから嫌なんですけどね。

それに食事の時に床の上に直接座るというのは、なんか、こう……抵抗があります。

「どう？ これは最近の私のお気に入りなんですけど」

「すごく美味しい」

食べているのは、インディラ亜大陸の家庭料理で、香辛料をたっぷり使った根菜やイモと鶏肉の煮込み料理です。

とろみのついた煮汁ごとご飯にかけて食べるのがヤポネス風です。

「この漬物と一緒に食べると美味しいわよ」

「シソの実の塩漬けはパスです。食感が変だし」

「うふふ、相変わらずね……………」

でも、ご飯は美味しかったからいいや。

……で、食後は趣味の天体観測をしています。

「どう？ 堪能した？」

「はい、すごく」

「それはよかったわね」

南の空にひとときわ輝く4つの星を結ぶと春のダイヤモンドと呼ば

れる星座になります。

そのオレンジ色と青白い色の夫婦星と呼ばれているのだけど、僕の興味は、ダイヤモンドの真ん中あたりにある一点です。

そこにある細長い楕円のような形の、ぼんやりとした雲のような感じの星。真ん中のあたりに黄色い星があって……

どちらかというと暗めな星なので、見落とし気味だけど。

今日に限ってはものすごく気になります。



## 第19話（後書き）

今でも教育現場で真面目に天動説を論じているとか。  
もちろん外国のお話だそうです……

あああああ。

SFとファンタジーの融合って難しいよお（笑）

## 第20話

雲の形を見極めようとしたけど……

見れば見るほど不思議です。たぶん楕円形っぽい形のはずだけど、横長の菱形のようにも見えます。どっちだろう……

「どうしたの？ 珍しい星でも見つけた？」

「変な星を見つけたんです……」

「どんな星だった？」

「星が菱形に見えるなんて、目がおかしくなったのかな……」

「座標はわかる？」

「あ、はい…… 経度は……」

天体望遠鏡についている計器から、方位と角度を読み取ると……  
すごいな。

「ああ、それはセレクトロ星ねえ。だいたい1万光年くらい先にある星よ。年老いた太陽と白色矮星がお互いの周りを回ってる関係で光が歪んでるの。でも、そこにも人の住む星が巡っているのよ……」

すご。今見ているのは1万年前に生まれた光、ですよね。

それだけの時間をかけて、ここにたどり着いたわけで。

星の海の長い長い旅路、かあ……

そういえば……

「光年って、星の海に挑んだ100人の勇者の物語…… でしたっけ？ 出てくるの」

「うん、そんな風にも呼ばれているわね……」

エスターは懐かしいものでも見るような、ちよつと悲しそうな笑

顔を浮かべた。

「ごめん、変な事聞いちゃった？」

「別にかまわないわよ。ちよつと思ひ出しちゃったことがあっただけよ。それより観測はもういいの？」

「もうちよつとだけ」

「そう……」

100人の勇者の物語というのは、内容自体は誰でも知ってるポピュラーなお伽噺。

昔々、ルアーのアルフォンソルに城ありき。

鉄で作った星の船。

勇者は名付けしイルグルと。

旅立つ先は、遙か彼方のウニヴェルゾ。

ポジトロニックに宿る精霊を友にして。

始まりはだいたいこんな感じだったかな。

ルアーって、月の事を指す古語だったよね。どうやって行ったんだろ。

そんな事を考えながら、いくつかの星の座標と時間を記録した。

だいたい星って、北の空の一点を中心にして、回っているんだよね。

中には、そうでないものもあるし、1時間半ごとに空を巡るような、速く動いているものもある。望遠鏡の性能が良ければ細かい事が分かるかもしれないけれど、そういうのは重たいから、早い星を追いかけるのには向かないかも。

そういえば、ハクシヨクワイセイって何なんでしょうね。まあい

いか。それを聞いたら長くなりそうだし眠くなってきたし。

## 第20話（後書き）

長くなってしまったので、実質的には前後編（？）になりました。  
文章力が足りませんねえ……Orz

## 第21話

観測結果を一枚の紙にプロットしていてやヴあい事に気が付いちやった。

天球の回転と同じ動きをしていない星って、観測ミスだよね。エスターはこういう事には、結構細かいから。

「あの赤い星ですけど、観測をミスったみたい」

夜空の星は、北の空の一点を中心にして円を描くように動いているんだけど、あの赤い星は、途中からSという文字をなぞるような動き方をしている。

その近くには赤い星なんかない。

それに目で見えてわかる星を間違えるとも思えないんだけど… やっちゃったかな？

「それは間違っていないわよお。火星の逆行現象と言われているわね。これは地動説が正しくなければ説明できない動きなのよ」

「地動説って、異端思想… でしょ？ 知りませんよ？ 異端認定されたって」

「コペポードは何も言わないと思うわよ」

「もちろん大司教様の事ですよね？」

コペポード様は、空気のようなお方です。

というか、ドワーフは一般的にモノ作りを得意とする種族ですが、何故か賢者で、国教会の大司祭をしているという、何か不思議な人です。

宗教というものについては鷹揚なジャポネです。そういう意味では、何でもアリと言えバアリですから。

玉ねぎみたいな形の金色の寺院とか、オシャカサマとか、アマテラスサマとか。

他にもたくさん神様がいて……　そういえば公開処刑された後で神様になったなんてのもあったかな。

それらは、それなりに仲良くやっているようです。

でも、宗教が違うと、妙な対立もあるわけで。

国教会というのは、そういう宗派の間を取り持っているというか

……

めんどくさい。全ての宗派の取りまとめ役みたいな事をしている、という事で。

それだけに、妙なところで重みのある発言をする人です。

「それにね、国教会というのは人間の宗教の総元締めでしょ？」

「そんなもの、みたいですね？」

「私はハイエルフだもん。人間のルールに縛られる必要はないじゃない」

「でも……　神様って……」

「私達だって、崇拜しているものはあるけど、それを人間に押し付けたことはないでしょ？」

「そう言えば聞いたことがないですよね、エスターが信じてる神様って」

「名前が違うだけかもね　創世のお話は結構あるでしょう？」

「たしかに、よく聞きますね」

「でしょ？」

神様というのは、たくさん居るようですが、実はたったひとつの存在かも。

例えば悪いけど缶詰の缶だって、見る角度によっては丸かったり

四角だったり。

でも、缶は缶だし。神様も一緒に、僕たちはほんのわずかな部分を見ているだけじゃないかなって、思います。

いくらなんでも缶詰の缶と一緒に神様に失礼かな。

それでも言いたい事は分かってくれと思う。

……神はフーグ・テラのはるか上に座して地に住む者を見られた。神は天を幕のようにひろげ、これを住むべき天幕のように張り、日と月のしもべとして月の一部を砕くと幕の上に振りまき、これを星と名付けた……………

これは誰もが知っている神話の、一節。

そして、それは、平穩の終わり。



## 第21話（後書き）

宗教だけじゃないけど、自分たちと考え方が違うからって、力づくでどうのこうのというのは、やっぱり大人の事情なんでしょうね。

そうそう。

エスターの信じている（？）神様は、ヴォイグエルという双子の神様だったりします。

## 第22話

気が付いたら時間は10時を過ぎていました。

「夜も遅くなってきたし、そろそろ寝た方がよさそうね」  
「はい」

迷路のような建物の中をメイドさんに案内してもらいながら、僕の部屋に。

「ジェシカさん…… こんなところに廊下なんかあった？」  
「ちよっと改装しましたので」  
「またですか？」

「ですから、瑞希様の記憶にある地理情報は、一部無効になっているとお考えになられた方がよろしいかと存じます」

3階と4階はエスターのプライベート空間だから…… じゃない！  
こんな大きな建物を、廊下や部屋の配置が変わるような大規模な改装を『ちよっと改装しました』で済ませてしまうというのが怖い。  
王宮の改装だって、部屋の内装を変えたりとかだけなのに。  
先月は何ともなかったから、その間の出来事のようにですが……

「同時にクローゼットの中身も更新しておきました」  
「えっ？」

「隠し扉の中身は手付かずです。洗濯はしましたけれど」  
「ばれてたの？」

「あれだけのカムフラージュならば他の所ならば及第点を差し上げますが、ここではダメダメなレベルですね」

「……そうなの？」  
「はい。ご精進なさいませ」

「それ以前に、クローゼットの中身を何とかってのは？」

「主の意向を無視するわけにはいきませんので」

「……そうだよね」

3階の一室は僕の専用という事になっています。

クローゼットからパジャマを取り出して…… 正確にはクローゼットの一部をこっそり改造して、そこにしまっただけだね。ジェシカさんにはばれてたけど。

だって、エスターが用意してくれる服は、かなり偏ってると思う。ズボンが無いし、ふりふりやレースがいっぱいついてるし。大地なら喜んで着そうだな。

まあいいか。いまさら文句を言っても始まらないし。

「これなんか、どう見てもドレスだよね」

「なるだけ控えめのものをご用意いたしました。よくお似合いだと思いますよ」

「というか、リボンとかふりふりのついてない服って無いの？」

「ございません」

明日はコレを着るわけか……

「さあ、早くお召し替えを」

「……つか、寝るんだけど」

「寝間着なら、こちらの方にございます」

たしかに、ひらひらは無いけど。

ひざ上10センチのワンピースを着て寝るというのは問題があるような気がする。

「お召し物は今夜中に洗濯を済ませる予定ですから、ご安心ください」

い  
」

「……まあ、いいか…… って？」

「お手伝いしますね？」

いつの間にかメイドさんが増えてる……

って、着替えくらい自分で出来ますって。

いやあああ……

## 第22話（後書き）

ちよ、  
W  
W  
W

まずかったかしら  
W  
W  
W  
W  
W  
W  
W

## 第23話

時刻は真夜中というか、月が沈もうとしている時間です。

ふと目を覚ました僕はのどが渴いたので、水を貰いに台所へ。決してお菓子のつまみ食いじゃないからね。

ドアを開けるて、廊下に出ようとして目に入ったものは……

「あれっ？」

廊下の奥の方に淡い緑色に光の幕が見える。反対側にもある。

これって結界だよね？

……閉じ込められた？

「まさか……ね」

何の気なしに近づいて、ちゃんと指先で触れてみました。

押し返されるような感覚があるはず……と、思ったら、何の抵抗

もなく光の幕を通り抜ける事が出来ました。

「変なの」

これが本当のエスターの結界なら、今ごろ生命はありません。

緑色の結界の前に張られている反撥結界が、行く手を遮るはずで  
す。

それを突破しても、あの結界があるわけです。

もしもこれに触れれば、昼間の触手のように黒焦げになるわけで  
そういえば、いつの間にあんな結界を張れるようになったんでしょ  
うね。深緑色というのも変です。

防御魔法で作った結界はオレンジ色だし。

「むーーーーー 眠いけど眠れないというか」

ぼーっとしながら廊下を通る間に、いくつかの光の幕がありましたけど、難なく通過。

なんか空の色が変だな。紫っぽいぞ……

「なんで僕はこんな所に？」

「あらあら、とんだ寝坊助さんね」

「エステル？」

背後から声がするのと同時に、廊下の照明が点いた。

「単刀直入に聞くわね…… あなた、何者なの？」

エステルの後ろには武装したメイドさんの集団。エステル自身も鎧を着こんでいる。

「エステル？」

「廊下の高エネルギー重層バリアを突破出来ても、屋敷を包む重層次元バリアまでは突破出来ないでしょう？」

狭められる包囲の環に押されるように、僕は後ずさりを始めた。

「高エネルギー重層バリア？」

「あなたが通り抜けた光の幕…… よ」

「あの緑色のやつ？」

「そう。この世界では、まだ実現不可能な高エネルギー・バリアよ」

高エネルギー重層バリア…… 半空間フィールドをコアとして展開するため、5次元ベースで発動する空間転移などの魔法は無効化される。

また、バリア自体を崩壊させるには……

あれれ？

エスターの言ってることが理解できる。

はじめて聞く言葉なのに。それが何なのか意味も分かる。

なんでなんで？



## 第23話（後書き）

ちよつと、えすえふ… してみました。

## 第24話

いつの間にか、ひとつの部屋に追い詰められていた。  
その部屋は武骨な石造で、ところどころに鈍く光っている所がある。

「ぼく、は……」

「いい加減にしない!」

エスターがぴしゃりと言い放った。

「今の人類には高エネルギー重層バリアを突破する能力はないわよ。  
そのバリアを、あなたは無傷で突破した」

「エスター…… 何を、いったい…… 僕は瑞希、天城・瑞希だよ」

「木の葉を隠すなら森の中。地球人の中に紛れ込もうとすれば、地球人の姿をすれば大丈夫だと思ったんでしょうけれど、詰めが甘かったようね。人類に敵対しないのであれば、悪いようにはしない。  
だから… 事情を説明してくれないかしら?」

「エスター…… 僕は…… わからない。本当に何も知らないんだ  
よっ!」

「さっき連絡があつたよ。鎮守の森の結界に穴をあけることに成功した、ってね」

母さんは結界魔法については、王国で1番の実力の持ち主です。  
たぶん父さんはその護衛と、結界内部への突入部隊を率いているという所かな。

逆に言うと、それだけの戦力を投入しなければならない『何か』

が、鎮守の森に現れたと言った方がいいのかな。

ひょっとすると竜騎士が飛んでいたのも、そのせいなのかな。

「母さん達の用事って、それ？」

「そう。そこで彼女は見つけちゃったのよ。絶対にある筈の無いものを」

「……一体、何を……」

僕は目だけを動かして、部屋の中を見回した。

気配を察したのか、じわりと包囲の環が狭まったような気がする。

「そこでね、天城・瑞希の遺体を…… 見つけちゃったのよ」

アマギ・ミズキノ シタイ ダツテ？

ボクハ、シンデナンカ イナイ。

ダツテ、ボクハ……

「嘘だ！ 僕はちゃんとここにいる！」

「そこで謎の敵から攻撃を受けたわ。死者こそいないけれど、被害も出てる。遺体は親族が本人だと確認したの。だとすれば、ここに  
いるあなたは何者？」

遺体？ 誰の？ 天城・瑞希の……？ 僕の死体？

ウソダ！

僕は死んでなんかいないよ！

だってここにいるんだもん。

ボクハイキテイル！

「僕は……」

「動かないで！ 下手に動くと粉々になるわよ？」

鈍く光っているのは魔力……魔晶石なわけ？  
床や壁に埋め込まれた魔晶石には爆裂の魔法が掛けられているのか。

魔法解除のアミュレット無しで触ると……どつかぁん！ ってわけだ。

——イケナイ、コノ場ヲ離レナイト。

それは稲妻のような一瞬の認識だった。  
ここから離れると言ったって、どうやって？

——どろいどA47ヲ確保シタ。ソレヲ利用シテ脱出ヲ。背後ノ壁ヲ破壊スル。

文章にすると、それなりの長さだけど、ここまでの会話は一瞬だった。

誰が話しかけているのかは分からないけど、

その途端に、メイドさんの一人がエスターに武器を向けた。

「何をするの？」

「現状での武力行使により論理破綻の発生する可能性が70パーセントを超え……」

——イマダ！

僕が背にしていた壁に埋め込まれた魔晶石が爆発した！

## 第24話（後書き）

次回は最終回！ ……なんて事はありません。  
もうしばらく続きますので、お付き合いくださいませ。

## 第25話

爆発は音というよりも、身体を突き抜けるような衝撃だったと思う。

一瞬で耳がキーンってなって、メイドさんたちが、爆風で吹き飛ばされていった。

僕はというと…… 無事だ。

至近距離での爆発って、慣れないなあ…… って、いつ爆発に巻き込まれた？

まあいいや。とにかく逃げよう！

僕は緑色の波紋を従えながら、廊下へ飛び出すと、一気に走り出した。

——ソコヲ右！ ……左ノ壁ヲ押シテ。

頭の中が真っ白になっていた僕は、ただ言われるままに建物の中を走り回った。

屋敷の中の鬼ごっこの結果は、僕に軍配が上がったようだった。

「ここは…… 僕の部屋か」

クローゼットに片手を突っ込み、最初に手に触った服をハンガーごと引っ張り出す。

机の上に置いておいたデリンジャーと予備の魔法カートリッジを服でくるむと、隣にあったペンダントを首にかける。

「御無事でしたか」

「ひっ!？」

振り返ると、部屋の隅の薄暗がりの中に一人のメイドさんがリュックサックを抱えて立っていた。

人の気配には敏感な方なのに、全然わからなかった……

——安心して。これハ味方ダ。

「ここには簡単な医療キットと魔晶石をいくつか入っています」

「う、うん……」

僕が持っていた服をリュックサックに詰めると、背負わせてくれた。

「夜が明けきる前に、このお屋敷から脱出なさいませ」

「え、え？」

「事情は後からご説明致します。今は、瑞希様が無事でいる事が大切なのです」

壁に見せかけた扉や壁の中の通路を通り抜け、やがて裏庭の一角にたどりつく。

「ここは？」

「非常用の抜け道の一つです」

大きな石灯籠をずらすと、その下にあった鉄板を持ち上げた。

うっわ、手のひらくらいの厚さがあるよ、コレ……

「はやく中へ！」

「君は？」

「残って時間を稼ぎます…… ご無礼を！」

「をわっ!？」

背中を蹴られたんだと気が付いたのは、石灯籠の下にあった穴の壁をゆっくりと眺めている時だった。

ふわふわと、ゆっくりと下に落ちていく。

身体というか、内臓全体が浮くような感覚は10秒も続かなかったと思う。

そして穴の底に身体が着いた時には、何のショックも感じなかった。

「ここからシオカに抜けられます」

「シオカだって？」

クバツからシオカまでは、4レグア半もあるよ？

「通路の奥にガゼルを用意してあります。……ご幸運を」

重い音とともに僕の頭上で、鉄板が下された。

——イソイデ。

促されるままに、ところどころに照明の灯された通路を走り始めた。

一体、何があったっていうんだろう？

というか、僕が何をしたっていうんだ！？



## 第25話（後書き）

怪力メイドさん登場の巻： でした。

次回で、ストーリー的には一区切りです。

というか、区切りのために幕間を入れていたりして。

## 幕間／執事の見たもの

石造りの武骨な部屋の真ん中にあるベッドには、ひとりのメイドが無残な姿になって横たわっている。もしも皮膚を突き破って飛び出しているのが、金属的な光沢を放つ人工骨格やマッスルシリンダーではなければ、人間だと思う事でございましょう。

これはハイウインド家で人間に混ざり、仕事をするメイドロイド A4 系列 7 号機。

ずいぶん古くから仕えてくれている機体ですな。

その枕元にいる私は、セバストウール。当家の執事でございます。

「どう？」

メイドロイドの身体にシーツをかぶせると、声の主の方へ振り返った。

「どうやらポジトロン脳は無事と見てよろしいかと」

「再起動は出来る？　とりあえず、何があったのかが知りたいわ」

ちらりと検査機器のディスプレイを見ると、相反する命令によってフリーズしただけのようです。コミュニケーション機器に接続すれば会話は可能でしょう。

「たぶん可能でございます」

「どのくらい？」

「1 時間ほど頂戴いたしとうございます」

「わかったわ。なるだけ急いでね」

メイドロイドの身体は、そう簡単に壊れるものでは御座いません。

そもそも彼らはドワーフとの肉弾戦を想定して設計されているのですから。

さすがに単体では無理がありますが、それなりの強度と筋力が与えられております。

人間と変わらぬ動きと、相応の筋力を兼ね備えたマッスルシリンダーを、中学校に進学したばかりの少年が過負荷に陥らせるとは。何があったのか皆目見当もつきません。

作業を続ける私の後ろでは、主がお客様をと作業を見守っております。

「ハイウインド様……」

「秘密通路の入り口を見つけ、鋼鉄製の扉を破壊出来るとは思わなかったわ。最大の誤算はメイドロイドを破壊された事よ」

「私もこの目で見るまでは…… 今でも信じられません」

「あの通路の出口はモズマの村にあるの。すでに封鎖済みだし、装甲騎兵を送り込む手筈も整ってる」

あとは、あの時に何があったのかを知るだけ。

そうひとりごちたエスターは、急に話題を変えた。

「そういえばカズマの容体はどう？」

「半月もすれば退院できるそうです」

「それだけでも運が良かったと言うべきね。ゆっくり養生するように伝えてくれる？」

「勿体ないお言葉でございます」

ハイウインド様の隣におられるご婦人の名は天城 希……あまぎのぞみ。

28歳という若さでドゥーラ王宮主席魔導士を務める瑞希様の御

母堂でございます。

鎮守の森に張られた結界を突破出来たのは、彼女の卓越した能力のおかげと聞き及んでおります。結界魔法のスペシャリストであるあの方が、結界に穴をあけるだけで、まる1日を費やされたとは、そうとうなモノでございますな。

ちなみに、当家の重層次元バリアに構造通路を作り、それを安定させるのに費やした時間は、半日ほどであったかと記憶しております。

それが縁となり、王宮にご紹介申し上げたわけですが……話がそれましたな。

まずは、A47からの事情聴取が必要……あの場にいたのは彼女だけで、秘密通路を死守しようとしたのでしょうけれど、詳しい事は分かりません。

ふと時計を見ると、おお、いけない。もう10時ではありませんか。

「……そろそろお茶のお時間でございます。早摘みの玉露が届きましたので、それをお楽しみいただこうかと……」

「そう。それじゃ、あとはお願いね?」

「かしこまりました」

私は一礼して主人を見送ると、ベッドに向き直った。  
交換部品のリストアップは済ませてある。

さあ、A47には蘇ってもらおう事に致しましょうか。

## 幕間／執事の見たもの（後書き）

メイドさんは、アンドロイドでした。

ちよつとだけ裏話をば。

このメイドさんは、11番目に開発され、改良を4回加えられたタ  
イプの7号機という意味です。

え？ 裏話でもなんでもない？

ごもつとも。

## 第26話

ごっはっんっ！ ごっはっんっ！

昼ごはんはファミレスで、ごっはっんっ♪

……暖かいご飯って、いいなあ。

「とりあえずドリンクバイキングでしょ？ あとは…… 天城クンは食べ盛りだからおぼろ卵のマーボーとごはんは大盛りでいっちゃいなさい」

「いったきま〜す♪」

あの通路はシオカのはずれにある小さな祠につながっていました。メイドさんが用意してくれた服に着替えて、とぽとぽと街の中を歩いていたら、マルシア先生に捕まりまして……

「まさか天城クンに女装趣味があるとハねえ。これは良いものを見たデス」

「まっ、ま…… マルシア先生？」

「微妙に似合っているところガまた、何というか、こう……」

「こっ、これには訳があつて……」

いたずらっ子のような表情を浮かべ、忍び笑いをもらす先生の背後に何かがいるような気がしたのは果たして気のせいだったでしょうか。

いや、それはない。

「職員室でみんなに言いふら「わあああ！」しましうネ」

「ドしたの？」

「それだけはヤです」

「それじゃア、どうしよかな…… とにかク家に来なさい。その  
恰好は少し微妙ネ」

「僕もそう思いますけど」

「そうね！ その通り！ やるなら、徹底的にやるべきネ♪」

くふふと黒い笑みを浮かべて宣言した。

「ええとお……」

「ドゥーラに住んでいる天城クンが、ワンピース着てシオカに来タ」

ま、まあドゥーラからは4レलग半も離れていますけどね。普通  
に来れば、乗合馬車で半日はかかりますよ。

それにワンピース着てますよ。

でもっ、これしか無かったんだもん。

「それについては、何と言いますか…… その……」

「女の子じゃないというのは一発でわかつちゃうし」

「えっ!？」

あの時にメイドさんが用意してくれたモノなんで、色合わせとか  
は、それなりにOKだと思ってたんですけど。

「まず髪がボサボサだし。そのあたりは氣を使うわね……」

色々と駄目出しをくらいながら、先生の家に。

「今日、何があるか知らなかったの？ 知っててやっているんだと  
思ったのに」

「知りませんよ?」

「まあ、いいわ。買い物に付き合って貰おうかしら。荷物持ちを頼  
むわネ」

お風呂に入って、メイクをしてもらって……

僕は女の子にされちゃいました。

そして、公民館でお買いものをして……

何故に女の子って？

決まってるじゃないですか。

あの時にメイドさんが用意してくれたのは、ワンピースと桜色のボレロだったから。

ふりふりが付いてなかったのが救いと言えば救いかな。

インナーにはパッドまでついてたし……



## 第26話（後書き）

瑞希くんを男の娘っぽくしちゃいました。  
けけけけ。

## 第27話

というわけで、お買いもの帰りのファミレスにいます。

「あら、マルシア。早いじゃない。戦果はどうだった？」

「ハツネはどこにいたの？ やっぱり今回は大漁ネ」

「西壁を中心にね。マルシアは？」

「今回は強力な助っ人がいるから、いろいろ回ったわよ」

ファミレスに入ってきたのは大地のお母さんだ。そう言えば親戚がこっちにいて聞いて聞いたことがあるな。会ったら、間違いなく僕だという事がばれてしまう。

やばいかな…… って、西壁を中心に、って？

ぺこりとお辞儀をするとおぼろ卵に手を伸ばした。

「うっわ、可愛い娘ねえ」

「親戚の子なの。貸さないカラね。どのみちヤポネス語は習ってないし」

「あらあ残念ねえ。まるでお人形さんみたいに可愛いのに……」

明らかに残念無念という表情を作ったけど、時おり教室で女子がまどっているような色のオーラが出ています。

冗談抜きでマズイ。

「ここいい？ 私もおなかぺっこぺこよお」

「夜行で来タの？」

「ううん、旦那と一緒に。任務とか言ってたけどね」

ぱんぱんに膨らんだ手さげ袋をずしっと床におろすと（本当にず

しっ！ って音がしたんだよう…）向かい側の席を陣取ると、片手をあげて店員に合図した。

午前中に連れて行かれた公民館でのイベントから、まあ、その……先生がそういう趣味の持ち主だって事はわかつちやいましたけどね。

まさか大地のお母さんまでそうだったとは……

「あ、特製黒酢の酢豚をお願いAセットつけてね。それからドリンクバイキングも」

「かしこまりましたあ」

店員が席を離れると、くつろいだ表情で先生に話しかけた。

「そういえば、うちの愚息の事なんだけど、最近なんだか変というか……」

「昨日の補習授業でハ、変わった所はなかったけど？ 何かあったの？」

「いえね、ガールフレンドでも出来たのかしら、って思ったから」

「どうしテ思うの？」

「強いて言うなら、母親の感！」

びしっと言い切っちゃったよ。

たしかに大地は女子に人気はあるけど、それだけは無いと思う。

「無理がアルわねえ」

「どこに？」

「たとエば、登校の時の服装とか」

「学生服に決まってるじゃない。いつも襟のホック止めてるのは私なんだから」

「金曜日はセーラー服着てたけど？」

「なあっ？」

やっぱり、ビックリするでしょ？

でもすごく似合ってたというか、服の着こなしが上手なんだよね。

「堂々と言ってくれれば、着せてあげるのに。ちゃんと用意してあるのに」

やっぱり、そっちでしたか……

## 第27話（後書き）

ふ、ふふふ腐腐腐……

だっ、大丈夫！

まだ大丈夫です。

……たぶん。

## 第28話

なんかなあ。

先生たちがお買いものの中身について盛り上がっている。

このまま逃げるという手もあるけど、後で何があるかわからないし。

暇つぶしに何か読んでみようかな。

「こ、これは……」

少女マンガかな。佐奈が読んでるのと絵が似てる。これで男？

ええと、美形な生徒会役員と、格闘技が趣味のドワーフがあんな事やこんな事をするってゆーお話で……

これをうちの学校に当てはめたら…… はまるなあ。

石橋先輩は生徒会の副会長で、かなりのイケメンだし。

そうすると、相手はドワーフで格闘…… 柔術部の…… 名前は忘れたけど、あの先輩はドワーフじゃないけど、ずいぶんとゴツイ体格だったよなあ。

で、もーほーな間柄、と……

おおおおおおおおオオオオぷ！

すんごくリアルな想像を…… ウナサレソウダ。

じゃ、次の本、行ってみようか。

がさがさがさこそ。

これなんか、薄くて手頃そうだ。へえ、これはマンガじゃなくて小説、ねえ。

……そのまま、1時間が経過。

「……女子生徒のカウンセリングもやっているけど、こんな話もアルのよねえ」

「ふむふむ……」

まだやってるのか。よくネタが尽きないなあ。

「瑞希クンがいれば、それハそれで」

「それはそれで美味しいシチュだけどねー」

えっ？

「大地クンは誘い受けて瑞希クンが攻めとか？」

「いやあねえ。そんな…… 大地受けて…… いや、それはそれで美味しいかも……」

「でしょう？」

「そうすると、こう、もつと何というか……」

「今年の流行はクラシックメイドと清楚なお嬢様系みたいねエ」

チョットマテ。

今までに読んだ同人誌の中身と、この会話。

ずいぶんとダブるんですけど？

「……でね？」

「本気でくつつけてみようかト思ってたらしテ？」

「今日売ってた本の中に無かったかしら、そんなの」

「ちよっと待って」

足元に置いてあった紙袋をこそごと探ると、一冊の本を取り出

した。

「これデしょ？」

「ああそうそう、やっぱり買ったんだ」

「この作者のは、全部コレクションしてあるワよ」

「……こっちは置き場に困ってるというのにい」

「あとで貸すわよ」

「期待してるわ。でね、このコスなんだけど、型紙がね……」

ヤッパリ、コスプレキタ。

……

……

………い

いやあああああ！



## 第28話（後書き）

瑞希×大地か、大地×瑞希？

そういうストーリー展開もあり？

……ナシです。

私はそこまでの熟成度じゃないです、はい。

## 第29話

わあい、そろそろおやつの時間だぁ♪

なんてワケがありません。ちよつと食べすぎです。コアな話に夢中になっている二人のために紅茶とケーキを注文して。

冗談で角砂糖を5〜6個放り込んでみました。

他にも、ものすごくカロリーの高そうなケーキとかタルトとか。

それにしても、窓の外に目を向けると騎士の姿が目につくなあ。

あれが全部コスプレとは思えないし。

普段より巡回の騎士が多いのは、この手のイベントのせいでしょうか。

「冬のイベントの時はこんなになかったワねえ」

「じゃあ今日だけですか」

「そうネ。今日は街の雰囲気もピリピリしてる」

その時三人組の騎士が入って来るのに気付いた。

「先生、騎士団が……」

「今だけハ、あなたハ天城・瑞希じゃなくて、私の姪のフェルナーダ」

「……先生？」

「OK？」

「スイン（はい）」

「じゃあ、いきましょウ」

「その前にトイレ」

「行ってらっしゃイ」

僕は個室に入ると、ポシェットの中身を確認した。

魔晶石が3個と、ヒールタブレット：これはポーション程ではないけど、体力をいくら回復してくれる。

そしてデリンジャー。

あとは、首から下げたペンダントはマジックアイテムです。魔力を流し込んで行きたいところを念じてやればいい。今回使うのは、このペンダントです。

場所を設定して、魔力を流すタイミングを調整して…… 棚の上に隠して、と。

魔晶石の一つが完全に光を失うと、光の粒になって消え去った。これでよし。数分後に魔法が発動するはず。

「お急ぎの所を申し訳ないが、その娘御よ。そなたはもしや……」

やっぱり来たか。胸につけている赤い鷲の紋章を見た時に嫌な予感がしたんだよね。

案の定、レジの前で騎士に呼び止められました。が……

「……おい！」

「どうした」

どうやら持ち運び型の魔力計か何からしい。

表示を見ていた騎士たちは、ひそひそと何かを話し合っている。

転移とか魔力値が高すぎるとか言ってる。

しばらくすると、騎士の一人が、

「呼び止めて申し訳なかった。どうやら拙者の勘違いであったようだ。許されよ」

そう言うのと、残りの騎士を引き連れて店の外に出て行った。

……ふう、少しだけ時間を稼げたかな。

とりあえずドゥーラに戻る事にしよう。

まさか、僕が転移先のドゥーラに戻るとは思わないだろうから。

え？ 設定した転移先がどこだったのか、ですか？

ドゥーラです。

それも、騎士団司令部の3階にある物置部屋。

建物からは、簡単に出られないし、それなりに人も多い。

ある程度の目くらましには、なってくれるといいな。

## 第29話（後書き）

空間転移というか、宇宙船の空間跳躍（ワープ？）は、跳躍先の座標の割り出しが出来るそうです。

空間跳躍そのものが理論上のものだから、完全に数学パズルの世界になってしまいうらしいですけどね。

それならば、転移魔法だって、転移先の割り出しは…… オツケー  
だと思っています。考えてみれば、魔法ってすごいかも。

### 第30話

夕暮れの鎮守の森は、静か過ぎてちよつと怖い。

僕はポシエツトの中から、最後のタブレットを飲み込むと、疲れが消えていった。

「ふう」

太陽もずいぶん西に傾いてきました。中学校の時計塔は……そろそろ5時になるところです。

あのあと、レジの前で伝票を前にして目をむいているマルシア先生と別れた後、馬車や箒を乗り継いでドゥーラに戻りました。

それなりに同人誌を読んでいたので、箒に乗せてくれたお姉さんたちは、おおむね好意的でした。色々と妙な雰囲気の中での道中でしたけど。

先生から『借り』た同人誌が通行証代わりにしたのがまずかったかも。

と、いうわけで。

最後の半レグアは歩きました。

だって、変に家の場所を教えたら何かヤヴァイ事になりそうなので……

それにしても。

なんで僕はここにいるんだろう。

シオカから北に抜けるという選択肢もあったし、間違いなくそのつもりでいたし。

でも、何故かここに来なければならぬような気がして……

森の中は、かなり荒れています。

折れた木とか、踏みしだかれた草むらとか。何かが爆発したのだろうか。甘ったるい匂いがする。こっちには折れた刀が刺さってるよ……

「ここに来ると思っていたわ」

形が変わった丘のふもとまで来ると、後ろから声をかけられた。振り返った先にいたのは……

「エスター…… 母さん……」

「セティアから事情は聞いたわ。それで大体の事情はわかった……」

「あのメイドさんから？」

「そう。事情が分かってから、シオカまで迎えを出したけど… あのアミュレットをうまく使ったわね。騎士団司令部は大騒ぎになったわよ」

その時の様子を思い出したのか、エスターはくすくすと笑いながら言った。

「この木も大きくなったものね。この木はね、1000年も前から森を見続けたの」

「……」

僕はエスターに促されるままに、木のうろの前にやってきて。

「この中に、あなたの遺体…… いえ、正確にはまだ遺体ではないわね。この身体は死んではないから。あの状況では、これしか無かったのも事実だし」

うろの中に横たわっている『僕』を見た。

透き通った繭の中に横たわる僕の胸は、かすかに上下している。

「この身体は、この繭のようなもので守られているのよ」

「これが、僕の…… カラダ…… デモ、ボクハココニイル」

…眩暈どころか意識が朦朧としてきた。

―パタツ――

―ピクツ、ピクピク―

「……あ」

一瞬気が遠くなった。泣きたくなってきた。

口からなにか白いものが抜けそうになった……………



### 第30話（後書き）

このあたりからは、最初のうちから決まっていたプロットです。  
もっと文章力が欲しい……

### 第31話

ドクリドクリと心臓を通る血液が冷たく凍って押し出され、全てを鈍らせていく。

「っ…あ、う…あ…うわあああああ！！！！」

喉の奥から湧き上がる、痛みを伴う絶叫。

エスターが何かを言っているが、聞こえない。いや…聞きたくないのかもしれない。

何で今まで思い出さなかったんだろう…？

忘れていた記憶。

いっそ、ずっと忘れていられたら良かったのに…。

あの日、僕は出逢って、そして話をしたんだ。

……………天空の彼方から来た訪問者……と。

気が付くと、時間が止まっているような感じになっている。

全ての音が消え、空気の流れは止まっていた。

エスターが僕の方に駆け寄ろうとしたまま、凍りついたように動かない。

周囲にいた護衛の人たちもだ。

「えっ？ 何が起きて…？」

森の中の風景は色を失い、そして静止していた。いや。

僕の正面にある森の一部だけが、普通の色合いを保ったまま……モノトーンの世界の中で、光の輪に照らし出された部分だけが色を残している。

それが、何かを探すようにゆっくりと動き始めた。

「な… 何なんだ、これ」

きよろきよろと辺りを見回しても光源らしきものは見当たらない。じゃあ、この光はどこから生まれたんだろう。

心の片隅には、状況を冷静にとらえていた僕がいるけど、実際には頭の中が真っ白になっていた。

ゆっくりと移動した光の輪は、僕の目の高さのあたりでぴたりと止まると、頭の中に声が聞こえてきた。

静かに語りかけてくるそれは男の声のようだが、女性の声にも聞こえる。そして、あらゆる年齢の声が重なりあったような声だ。

——やはりキミは興味深い存在だ。

だだだ誰ですか？ 一体何が起こったんだ。まさか捕って喰わ

——そんなに怖がらないで欲しい。ふむ、この場合は……

はじめまして、と言えきかな。

安心したまえ。私はキミに危害を加えに来たわけではないのだ

……

頭の中に声が響いても、別に不快な感じはしなかった。

というか、その頃は半分眠っていたし、寝ぼけていたんだと思っ  
てた。

でも、それは否定の仕様のない現実だった。

——私は君達と同じ生命体だ。君達の種族より僅かに進化した存在に過ぎない。

物資創造の秘密を探り当てた我々は、物質的な制約に縛られないレベルの生物に

進歩した、ただそれだけの事に過ぎない。

それだけの事って……

### 第31話（後書き）

ようやく、一区切り？　です。

ここからは一気にエンディングまで持っていこうかなあ、と……

### 第32話

よく考えれば、こいつちょっと怖いな。

自分の事を進化した存在って言ってるけど、どこかにトリックが仕掛けてあるに違いない。声のほうも同じ原理かな。

ひょっとして、エスターが考えた大掛かりなイタズラ…… じゃないな。いくらなんでも彼女は、そこまで悪乗り出来るような人じゃない。

じゃ、じゃあこれは本物？

こういう相手に何をどうしろってあれ思考が読まれてるのかな？

——そりゃあ、君たちの種族よりも少しだけ進化した存在だからね。

わああアアアアあ ガチで読まれてるとは思ひもなかったよ  
う！！

——いい感じで混乱していて面白いが、とりあえず私の話を聞け。  
まずは深呼吸だ。

スーハー、すーは……

……

……

……

——落ち着いたかね？

ええと、はい…… じゃあ、あなたは誰ですか？

——君たちよりも少しだけ早く進化を始めた存在だ。

ほんの30万年くらいだな。宇宙的な規模では、同時と言っても構わないだろう。

まあ、仲良くしようではないか。

好意的な説明をありがとうございます。

で？ いきなり頭の中に話しかけるのはいいけど、普通はパニくりますよ？

——キミという人物はそれだけの完成度が高いという事だろう。

いやいや、まだ幼生体だというのに大したものだ。

将来、キミは大物になるだけの要素を持っているぞ。

誉めてもらったんですかね。

——ふ、ははははは。面白い。実にキミは興味深い人物だ。いや実に興味深い……

色々な出来事が重なってしまったが、身体の複製には完全に成功したようだ……

光るリングは、笑い声の尾を引きながら消えていった。

そして……

世界が元の姿を取り戻した。

「夢じゃ… なかったんだ……」

あの日、何があったのか、ようやく思い出した。  
母さんが僕の事をやさしく抱きしめてくれて。  
エスターが静かに話しかけてきた。

「……話して、くれるわね？ あの時になにかあったのか」

エスターは静かに話しかけてくれた。光の環の正体は何者なのか、なぜここにいるのか。そのあたりの事情は大体わかっていて、と。そのうえで、僕の身に何が起こったのか。

それを、話して頂戴、と。



### 第32話（後書き）

いきなり頭の中に話しかけられたら……  
やっぱりパニックりますよね。

### 第33話

僕が鎮守の森に行くのは、そこに独特の雰囲気があるから。しん、と静まった雰囲気が好きだった。

おだやかな陽射し。時々、風にざわりと音を立てて揺れる枝。なによりも、そこにある古木のうろが、秘密の隠れ家にぴったりの大きさだったという事もある。

学校にいても、人の出入りのほとんどない図書館で静かにしていても、どこからともなく現れる上級生にぎゅーっとされるし。

僕は一人っ子だから、夕方過ぎに父さんと母さんが帰ってくるまでは、家に帰っても一人きり……。は、ないか。

毎日のように佐奈が世話を焼きに来るから。

それが嫌だとは言わないけれど、時々なんとなく…。ね。

とにかく落ち着くというか、一人になれる空間というか。ここは僕だけの世界だ。

その日も、僕は森の中を散策中というか、何をするでもなくぼーっとしていた。

ただ、いつもと違う事といえば……。奇妙な音が聞こえる。

「なんだろう？」

丘というか、塚というか。

それが、奇妙な音を立てて、ぶつぶぶぶ…… という感じで震え始めて。

あわてて塚から離れようとした時に……

塚が地面に吸い込まれるように消滅するさまを…… 見た。

そして、それからは一瞬の出来事だった。

まず一回目は正面の塚から生まれた衝撃波。

鈍い音と一緒に、体がバラバラになるかのような衝撃。

音なんか聞こえなかった。

気が付いたら飛んでいたんだけど、周りの風景が急激にスローに見えていた……

塚が半分くらい無くなって、巨大なすり鉢状のクレーターになっている。

その上に、サファイアのように青く透き通った、一辺が2メートルほどの正八面体が浮いていて……

その中心には紫色に光る何かが、ゆっくりと脈打つように輝きを変えながら……

そこまで見た時に、背中から何かに叩き付けられたような、二回目の衝撃。

そして、身体の中から生まれたいやな音。

ぐしゃっ！ というか、ぼぎゃっ！ というか、そんな感じの音

……

正直、痛いとか苦しいとかはなかった。

変な音がして、気が付いたら地面の上に寝てた。

ああ、空が明るいなあ…… なんて思っていたら、なんか眠たくなってきた……

変な声が聞こえてきて……

——まさかこんな事になるとは……

それにしても、この惑星の生命体はなんという短命…… 償いは……

悔恨と心配が入り混じったような、あらゆる年齢の声が重なりあったような声だった。

それが僕に話しかけてきた。

——こちらの手違いで、あなたの身体を破壊してしまったようだ。

破壊された身体を元通りにする時間を……

その間は、代わりの身体を用意する。物理的に破壊出来ない身体……

たしか、そんなような事を言っていたような気がする。

### 第33話（後書き）

……やっちゃった。

このあたりまでなら、大丈夫ですよね？

……ふう。

### 第34話

ふと気が付いたら、僕は誰かの身体を引きずっている。

学生服を着たその身体は、結構小さい。僕とそんなに変わらないという事は、大地か2組の田野君か… ミト君かな？

大地は図書委員の当番だから、違うと思う。

それよりも、この森には僕しかいないのは分かっている。

それ以前にこんな森の奥に足を踏み入れるなんて、誰も思いつかないから。

……じゃあ、コレは誰だろう。

どうやら、行先は背後にあるクスの木のようにだけど。

その木の内部がウロになっていて、秘密基地になっているのだ。

……駄目だ。

もう体力の限界。身体に力が入らない……

さっき、ものすごい勢いで、どこかにぶつかったせいかな。

最後の力を振り絞って、大きな木の根元にたどり着いた。

木のウロに、彼の身体を押し込んだ。

「……もう駄目。体力の限k……！！！！？」

仰向けになった彼の顔は……

僕…… だった。

あれが僕だったら、ここニイル僕ハ……

.....

.....

...

「...くん！ みずきっ！ 返事をして！」

ゆっくりと視界が開けた。

朦朧とした俺の脳髄はまだ活動することを拒んでいるけど、そんな呑気な事を言っていられる状況ではないはずだ。

急いでこの場を離れないと... 動け、僕の身体...

「もういい！ もういいのよ...」

エスターが僕の体を抱きしめていた。

「あなたは天城・瑞希、そうなのね...」

いや、僕は僕だけど、僕じゃない...

だって、この身体は母さんが生んでくれた身体じゃないもの。

僕の本当の身体は...

.....そこで眠ってる。

身体の中はぐちゃぐちゃになっていて、繭から出たら数分で死んでしまうけど。

それでも、本当の天城・瑞希は...

あそこで寝ているんだから。

「そんな事はどうでもいいの！ あなたは瑞希ちゃん... なのですよ？」

「僕も、天城・瑞希... だけど、身体は作り物...」

「それでもいい！ あなたが生きていてくれれば、それでいいのよ.....」

ぼんやりとした視界にあるのは、エスターの泣き顔だった。  
そして……

「かあ……さん……」

再び聴覚が歪み、世界が色を失っていった。



### 第34話（後書き）

人間の意識や記憶といった「情報」を完全にコピーすることは、理論上は可能とされているそうです。  
じゃあ、どうやって？

そこまで研究（？）は進んでいないそうです。

### 第35話

シオカで瑞希ちゃんの保護に失敗した時は、目の前が真っ暗になったけど、あの子もなかなか面白いトリックを使ってくれたものねえ。

おかげで、騎士団司令部は半日以上も機能停止よ？

それなりに考える時間が出来たし、彼と合流できたから、良しとするけれど。

あ、王宮関係に結果を話しておかなきゃ駄目ね。かなりの戦力を動かしたし、騎士団長が病院送りになるような事件だったから。

あゝあ。何かいい方法、ないかしらね。

他にも後片付けがいくつか残っているけど：

ええと： まあいいわ。

すぐに思い出せないようなものは後回しでも問題ないでしょうから。

「中尉？」

「はっ、御前に」

一人の騎士を呼ぶと、王宮が護衛にと付けてくれた部隊を撤収させるように告げた。

「どうやら問題は解決したようです。撤収しましょう…… この子は早く病院に」

「承知いたしました」

看護兵が瑞希ちゃん担架に乗せている。

このまま中央病院の個室に直行してもらいましょう。

検査やら何かで、一週間は出てくる事が出来ないと思うけど、それは仕方がないわね。

「あの、ハイウインド様？」

ノゾミは何かを言いたそうに、こちらを見ている。

彼女には、ある程度納得できる説明が必要でしょうね。夫は病院送りにされたとし、その犯人は逃亡したまま行方不明。死んだと思った一人息子は生きているし。

ある程度事情を説明しなければならないわね。

今後の事もあるし……

「どうやら新しい術式の転移魔法に巻き込まれたみたいね。あそこにあるのは……」

木のうろに視線を向けると、話を続けることにした。

「一種の虚像。なぜこうなったのかは詳しく調べるけど、しばらくしたら消えるわよ」

「そう、なのですか」

「転移魔法は時間と空間に干渉する魔法だから、こういう可能性は昔から予想されていたけど、ね。私も見るのは初めてよ」

あたりを見回すと、残っているのは私のメイドたちだけ。これなら大丈夫ね。

あの娘たちに任せておけば、この場を完全に封鎖できるから。それを確認した私は……

「そして……」

私はある場所に足を運んだ。

と、言ってもさっきの場所から10歩も歩かない距離だけど。

「今回の騒動は、あなたが引き起こしたのよねえ……」

視線の先にあるのは、小高い塚のあった所。

今はその形を大きく変えてしまっているけど。

——やはり、この場合は『初めまして』というべきなのだろうね。

### 第35話（後書き）

メイドさん達は、当然のことながら生身のそれじゃありません。  
前に出てきたのとは、別のタイプですが…… どーでもいいですよ  
ね。

### 第36話

丘が消え、すり鉢状になった所に、正八面体が浮かんでいた……その中心には紫色に光る何かが、ゆっくりと脈打つように輝きを変えている。

言葉とは裏腹に、この状況を楽しんでいるようだ。

「そうね。この場合は初めまして、というべきね。宇宙からの訪問者さん」

「こいつはっ！ ……ハイウインド様！」

ノゾミは私をかばうように前に出ると、杖を構えた。その先には、すでに物騒な光が宿っている。

「落ち着いて。あれは敵ではないわ」

「でもっ！ 夫は、息子はあれに…」

「いいから！ とりあえず杖をおろしなさい」

私はノゾミの言葉を遮ると、それに話を続けるように促した。

——あの幼生体には悪い事をしたと思っている。

償いのつもりで肉体を複製して、精神や記憶などの一切の情報を『移植』したのだ。

ささいな事で生命を失う事が分かったから、ある程度の改良をした上で、だ。

あの肉体を諸君の技術手段で破壊することは、極めて困難だろう……

「移植については問題なさそうだけど…残ったあの身体は？」

——修復作業中だ。外観の一部は何かあったが、内部は完全に破壊されている……

これはに時間がかかるだろう。今の私から見れば異質な生命体の修復だから。

「修復が終わったら、情報を移植しなおすのね？」

——そのとおり。

「どんな高度な技術も、所詮は自然を模倣するご都合主義に過ぎないわよ？ 身体の修復は、あなた達にとっては太古の技術…… ロスト寸前のテクノロジーね。ならば予測不可能な不具合が出ない確率は、ゼロではない筈だけど？」

——指摘の通りだ…… 何か妙案があるようだが、私は何をすればいいのかな？

「あの子の近くにいる事が出来れば、何かと対処しやすいでしょ？ だから……」

——なるほど。実に興味深い体験が出来そうだ。そういう事であれば……

「あとは状況設定ね。ノゾミ、あなたにも協力してもらうけど……」しばらく考え込んでいたが、おもむろに話し始めた。

……こうして長い3日間は、ようやく終わりを告げた。

魔界からの邪悪なる訪問者は、異世界からの援軍によって撃退する事ができた。

魔界からの尖兵により、拉致されていた少年は無事に解放された。  
幸いにも少年には怪我はなく、病院で一週間程度の静養をすれば

……

「……と、いう事のはどうかしらね？」

「なんか無茶苦茶なお話ですね」

「皆が期待しているような、荒唐無稽な物語を提供するだけの事で  
しょ。それともノゾミには他にいい案を？」

ノゾミはしばらく天を仰いでいたが、小さくため息をついた。

「……で、誰を目撃者みせうしやに仕立て上げるつもりですか？」



### 第36話（後書き）

ホントに、誰を目撃者にしましょうね。  
王宮で何があったのかについては、スキップです。  
書くとしたら、外伝扱いでしょうか。

## エピローグ

あの日から一週間が過ぎました。

今日は退院祝いという事で、ちょっとしたお祝いをしてくれるそうです。

退院手続きが終わると、そのままエスターが転移魔法で会場にGO！

というわけで、未だに寝間着姿という間抜けな格好です。

「天城くん、ちょっといい？」

「はい、なんででしょう」

「今日のために服を仕立ててみたんだけど、袖を通してくれる？」

大地のお母さんだ。右手に持ったトートバッグに入っているようだ…… 何か見憶えのあるような気もするけど。特にちょっとだけイタい柄とか、色合いとか。

バッグの口からは、紫みを帯びた深い青色の生地が見え隠れしている。

「退院のお祝いに、と思ってちようだい」

「……有難うございます」

「はい、じゃあこれ」

「……………なな、な………なんで!？」

トートバッグの中にあった衣服——ワンピースとボレロあゝんど、その他諸々——を見た僕は、絶句するしかなかった。

「おばさん、ちょっと頑張っちゃったわよお♪」

「……頑張る方向に問題があるような気がするんですけど？」

「だあってえ、せっかくあの時フェルナーダちゃんが着てたのを再現したのにい」

「お母さんも見たいなく 息子の、は・れ・す・が・た。それとも、こっちを着る？」

母さんが持ってきたのは、桜色のふりふり。そんなの、どこのお姫様が着るんですか。

「……どっちもやです。もっとまともな服はないの？」

「充分にまともよ」

この際、学生服でもなんでもいいから！

「ここは覚悟をきめちゃいましょうね。身替えを手伝ってあげるから♪」

「堪忍してください！」

振り返り、全力の猛烈ダッシュ「あら、主役がどこに行くの？」

…失敗です。

母さんとエスターに、あっさりと捕獲されてしまいました。

「はい。じゃあこれをここに付けて、これを穿かせて。……あら、生えてないのね♪」

「やだああああ！」

抵抗むなしく、すっぽんぽんに剥かれた僕は、次々に衣装を身に着けさせられて……

はあ、運命の神様がいたら、呪ってやりたいものです。

さらにメイクが終わり、ぐったりと椅子に沈み込んでいる僕の前に、光の輪が浮かび上がりました。

——ふむ、有機的な身体を持つという事はこういう事か。

遠い祖先の姿を模倣するのも、悪くは無いかも知れない。

「え？」

「どうだろう、似合うかな？」

聞いたことのない声に振り返ると、蒼銀の髪を長く伸ばした美しい少女がいた。

華麗にターンをして群青色のスカートと銀の髪をふわりと翻す。  
僕が着ているのと同じデザインの服…… だけど……

この子は誰だろう？

深みがかったサファイア色の髪と紫色の瞳……

まさか、ひよっとして……

「早くしないと、みんな待ちくたびれてるよ。オ・ニ・イ・チ・ヤ・  
ン」

どこかに行ってしまった、僕の平穏な生活。

できれば、すぐにでも帰ってきてください……

## エピローグ（後書き）

このお話は、これで完結です。  
長々とお付き合いいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6945s/>

---

ディア・マイ・フレンズ

2011年6月2日09時22分発行